求道
第五卷
第拾壹號
明治四十一年十一月二十日（第三種郵便物認可）
明治四十一年十一月一日發行（毎月一回一日發行）

求道第五卷第拾壹號目次

求道

◎如來の加威力

◎歎異鈔と蓮如上人御一代聞書

感謝

◎晩秋の所懷◎常照の光◎御正忌◎春秋九十年

講話

◎願力成就　近角常觀

告白

◎唯佛のみ眞實也　後藤辨宏

◎曠刼多生の御手引き　碓氷くに

講義

◎他力信仰の淵源　近角常觀

三　信仰と人生

歌詠

◎やむひと　增田八風

時報

◎求道の好季節　◎大谷派傳燈式　◎沼津の同朋

講話

毎日曜午前九時
求道學舍
《本郷森川町一番地》

毎土曜午後二時
第二求道會
《九段坂佛教倶樂部》

毎月二日午後七時
第三求道會
《日本橋蠣殼町說教所》

求道　第五卷　第拾壹號

如來の加威力

人生に於て我等がはからひを以て種々の心配をなすは、如來の加威力といふことを認めぬからである。如來の加威力といふは我等の上に直接加へたまふ如來の威神力である。抑〻他力の他力たる點は此如來の威神力があるからである。經に十方恒沙の諸佛如來無量壽佛の威神功德不可思議なるを讃嘆したまふとある。名號といふも、本願といふも、此不可思議なる御力に外ならぬ。天親菩薩が歸命盡十方無碍光如來とあるを曇鸞和尙釋して曰、若し如來威神を加へたまふに非んば、將何を以てか達せん、神力を乞加す、所以に仰て告ぐと。是實に、是加威力といふことを明かに我等に示されたる言である。此の如き盡十方無碍光如來の我等の上に加へたまふ御力が本願力である。故に本願力廻向といふことは、此の如き大慈大悲の御力を我等一人一人の上に加へたまひ、さしむけたまひ、徹到圓融したまふことである。

聖人略文類に『然るに薄地の凡夫底下の群生淨信獲叵く、極果證し叵し、何を以ての故に、往相の廻向に由らざるが故に、疑網に纏縛せらるゝが故に』とある。此文は輕々に看過すべきでない。抑々薄地底下の凡愚、信仰を得、涅槃を證する能はざる所以のもの、即ち如來他力の往相の廻向を蒙りて直接如來の威神力に接し奉らず、又疑惑の網にかゝりて如來の力を信ずることが出來ぬからである。然らは如何にして眞實の信心を得べきかといふに、即ち次の文に『乃し如來の加威力に由るが故に、博く大悲廣慧の力に因るが故に、淸淨眞實の信心を獲る、是心顚倒せず、是心虛僞ならず、』とある。即ち如來が威神力を加へて下さる故に、其力が屆いたのが眞實の信心である。即ち如來大悲の廣大なる智慧の力によりて、我等に淸淨なる信心を生ぜしめたまふのである。故に一たび我等に此加威力及大悲廣慧力が屆いて下さつたならば、決して顚倒することもなく、虛僞なることもない。我等が如何にはからひをめぐらすと雖、信心を生ずることは難し。故に結文に『信に知ぬ、無上妙果の成じ難さにはあらず、眞實の淨信實に得ること難し、眞實の淨信を獲れば大慶喜心を得』とある。畢竟我等は眞實の淨信を獲るや否やの一點にあ

る。而して其淨信はつまり如來の加威力の徹到した有樣である。其加威力それ自身が即ち往相の廻向である。即ち如來の御力を我等の上にさしむけたまふが、即ち本願力廻向である。他力眞宗の骨目は結局此如來廻向を受くるの一つである。

全體從來廻向といふことを口にし耳にするも頗る一般的の考に流れて、兎角適切に個人的に我身上に加へらるゝ力であるといふことが明らかになりて居らぬ。抑〻宗敎の事を一般的に考へるといふことは根本的の誤謬である。成程佛よりみそなはすときは十方衆生平等に違ひなけれども、平等といふことは一般的といふことてはない、一人一人に平等に力を加へたまふのである。故に我等如來の御惠みを頂くときは、親鸞一人がためなりけりと頂かねばならぬ。いかにも如來の本願に變りはなけれども、個人々々を本願に引き入れたまふ御手廻はしは、一人々々別々である。即ち本願力廻向は同樣なれども、愈々各個人か其御力を蒙りて御受けする場合は自分々々に頂かねばならぬ。是れ如來廻向を受くるにつきて最も肝要なる點である。

和讃に曰く、『往相の廻向ととくことは、彌陀の方便ときいたり、悲願の信行えしむれば、生死すなはち涅槃なり』とある。この彌陀の方便ときいたりとある文字を決して疎かに見てはならぬ。ときいたりとは如來矜哀の善巧方便の力によりて、愈々如來の御心の屆くべき時が到りたのである。私は二門偈を拜誦して如來成就の五念門を仰ぎたてまつる毎に、如何に如來が我等がために御心を盡したまひしかを感ぜざるを得ぬ。特に禮拜門に曰く、『云何んか禮拜す、身業に禮したまひき、何彌陀佛の正遍知、諸の群生を善巧方便して、安樂國に生ずるの意を爲さしめたまふが故に』とある。嗚呼如來は兆載永劫の間我等がために御心を屆けんがために、合掌禮拜したまひし御念力にて、種々に善巧方便したまひ、遂にときいたりて初めて我等が心の中に如來の御心が屆きて、初めて無上の信心を發し安樂國に生ずるの意を爲さしめたまひ、茲に如來を禮拜恭敬さして下さるのである。故に彌陀の方便ときいたりといふ一句は此往相の廻向と離すべからざる眼目である。

かく如來の廻向を受けたまふことは聖人御自身の自ら感じたまふ所である。そは聖人が法然上人に遇ひたてまつりたまへることを感謝したまひし和讃で解かる。曰く、『諸佛方便

ときいたり、源空ひじりとしめしつゝ、無上の信心おしへてぞ、涅槃のかどをはひらきける』、是れ實に法然上人の出世したまひしこと、全く諸佛方便ときいたりて、親鸞に諸佛の本意選擇本願をしらしめたまはんが爲なりと頂きたまひし述懷である。而して此の如き善知識出世したまふと雖、若し疑網に纏縛せらるゝなれば、所謂よくきくこともかたければ、信ずることもなをかたしといふべきである。そこて次の讃に『眞の知識にあふことは、かたきかなかになをかたし、流轉輪廻のきはなきは、疑情のさはりにしくそなき』とある。結局往相の廻向を頂かず疑網にまとはるゝなれば如何にするも信も得られず、果も得られぬ。然るに唯如來の威神力を加へたまひ、大悲廣慧力の御催あればこそ、初めて時到りて眞の知識に遇ひ、薄地底下の我等初めて眞實淸淨の信心を獲て、極惡深重の身にして諸の聖尊の重愛を被りて大慶喜心を生じ、生死即ち涅槃のさとりの結果に達する次第である。

かくの如く如來の廻向といふことを我身一人の上に頂くことに氣をつけねばならぬ。親鸞聖人は聖德皇太子の御導によりて此二種の廻向に引き入れられたまひしを以て、特に聖德奉讃にはます〳〵其意が明らかてある。曰く、『多生曠劫この世まで、あはれみかふれるこの身なり、一心歸命たへずして、奉讃ひまなくこのむべし。聖德皇のあはれみに、護持養育たへずして、如來二種の廻向に、すゝめいれしめおはします』是れ此世のみならず多生曠劫の恩德を感謝し、矜哀の善巧に護持養育せられて、遂に如來二種の廻向を受くるまで方便引入したまひし大悲を讃仰したまひたのである。直接に言へば聖德太子法然上人夫自身が還相の御身として如來の本願にすゝめいれしめたまふ御姿てある。即如來が二菩薩をつかはして引導したまふのである。即ちこれ如來の廻向である、如來の加威力である、聖尊の重愛である。

此に至りて如來の加威力が人生の上に直接にあらはれてくることが明らかになつた。即ち信の一念は其威神力が屆きて下さつた時である。而して其後の生活は常に其威神の下に確信して感謝の日暮をするのである、蓮如上人の御言に『佛法者には法の威力にてなるなり、威力でなくばなるべからず と仰られ候』とあるが此處である。『されば佛法をば學匠物しりは云ひたてす、たゞ一文不知の身も信ある人は佛智を加へらるゝ故に佛力にて候間、人が信をとるなり、此故に、聖敎よみとて、しかも我はと思はん人の佛法を云ひたてたることな

しと仰せられ候事に候、たゞなにしらねども、信心定得の人は佛よりいはせらるゝ間、人が信をとるとの仰に候云云。『又『聖教よみの佛法を申たてたることはなく候、尼入道のたぐひの、たうとや、ありがたやと申され候をきゝては人が信をとると前々住上人仰られ候由に候、何もしらねども佛の加備力の故に、尼入道などのよろこばるゝをきゝては、人も信をとるなり、』、是實に如來加威力の御あらはれである、たとひ一文不知の人なりとも此加威力を蒙りたる人は即ち大威德者である。亦廣大勝解者である。苟も人生此加威力まします已上は、我等は唯此如來を信じて其御はからひに任せ、動靜出沒一に御力のまに〳〵感謝の生活をなすの外はない。

歎異鈔と蓮如上人御一代聞書

歎異鈔が親鸞聖人の他力信仰の眞髓を闡明する聖教として青年求道者の爲に適切なることは今や一世の認むる所である、固より聖人の御自作にかゝるものは渾然たる信仰を顯はして其圭角なく、圓融圓滿なる有樣は亦格別であるが、歎異鈔はきはどく絶對他力を顯はすことに於て、語勢の力强くして餘地なきことに於て、文章言語の簡潔適切なることに於て殆んど古今に比類なき信仰書であるといふも決して過言ではない、而して歎異鈔が信仰を顯すに剴切なるが如く、蓮如上人御一代聞書は修養の書として亦比類なき聖教である、修養とは勿論自力修養のことではない、前號に所謂信仰即修養の意味にして、即ち信仰の上より人生の上にあらはるゝ平生の行爲である、此點に於ては歎異鈔が信仰の點に於て缺くべからざる如く、御一代聞書は信仰的修養の書として缺くべからざる寶典である、吾人は生れて此二書を拜讀することを得るは、ひとへに是れ親鸞聖人蓮如上人の吾人に與へたまふ廣大なる恩寵である。

今特に私が此題目を掲げて一言せんと欲することは、私自身が此兩聖教に對する關係につきて聊か其感想を述べんとすることとてある、先づ第一に感謝に堪へざることは、今回大谷派本願寺に於て傳燈式を行はれ御就職なされた彰如上人が、嘗て私の父に賜はりし御教化に

一、眞諦門の御勸化をうかゞうには歎異鈔を拜見すべし

一、俗諦門の掟を守るには蓮如上人御一代聞書を拜誦すべし

と仰せられた、是父が晩年に被りし御教化なるも、恰も一代の間頂かれた御教化である、何んとなれば特に漢和聖教中に於て特に此兩書を尊信したことが著しかつた、而して命終の時此御教化を拜して淨土往生の素懷を遂げたのである、是實に今より五年已前の事である、故に此御教化は私にとりては善知識の御教化たると同時に、亦我亡父の最後の遺訓である。

而して特に不思議なることには、恰も亡父の入寂と同時に、我が求道學舍に於て毎朝佛前に參集して歎異鈔を拜讀する習慣が始まりたのである、畢竟是れ學舍の人々が自ら進みて此の如き發意をなしたのであつた、今より回顧すれば其間に何等か意味があるかの如く思へる次第である、「釋迦彌陀は慈悲の父母、種種に善巧方便し、われらが無上の信心を、發起せしめたまひけり、」何事も如來の御催なくては企つることは出來ぬのである。

社會も亦此頃より頻に歎異鈔を拜見するの傾向を生し、世の惱める人、苦める人、罪に泣ける人、ひたすら闇に迷ひて光明を求むる人の爲に、唯一の救濟は歎異鈔たることは言ふを要せぬ次第である、而して一年程を經て求道學舍に於ては歎異鈔と共に亦御一代聞書をも毎朝拜讀する習慣を生ずるに到りた、是實に偶然の出來事の如くにして決して偶然ではない、かへす〳〵も善巧攝化の矜哀を感謝する次第である。

全體求道學舍に於て舍内一般の學生の人々が、佛前に於て勤行を爲すに至りたる經歷を考ふるに、實に意味のあると考ふる、ついでながら詳かに之を述ぶるに、已上歎異鈔及び御一代聞書を拜讀するにも、一往の規則を以て定めたものでなくして、各夫れ〳〵の因緣が熟して始めたものなれば、一たび始めたものを變更するといふことはない、其後或時は未燈鈔若くば口傳鈔を拜讀したこともあつたが、結局歎異鈔と御一代聞書は永久變はらぬ朝夕拜讀の書となつた、そして始めは此等の書を拜讀して信仰の味を各自自然に體得することで

あつたが、夫では朝夕の禮拜としては物足らぬ、言ひ換ゆれば、佛前の禮拜は唯信仰を理解するばかりでは不滿足である、何とかして諷誦嘆咏して佛德を讃嘆したいといふ念が起りた、そこで世上一般に實行しつゝある正信偈念佛和讃を諷誦する勤行式なるものゝ大に意味深き意義を根本的に理解することを得て、求道學舍に於て毎朝丁寧に此勤行を實行することになつた、從來眞宗の信仰深き家庭に於ては勤行を爲す習慣はあるも、所謂習慣的に之を爲すもの多くして、根本的に之を理解することが少きものをゆへ、折角の勤行を爲しながら、敬虔の情、淸新の風を缺きて居る、求道學舍のは其節曲は必しも正鵠を得ざるも、其精神は頗る生きつゝある次第である。

其最も甚しきは本年の四月頃より阿彌陀經の音讀をも始めた、是が普通の宗敎學校や、僧侶の團體であるならば、毫も不思議なることではないが、求道學舍は却て從來佛敎に因緣の少かりし人抔もあるに拘らず、夫等の人が却て讀經諷誦を好むといふはよく〳〵大悲の善巧の深きことを感謝し奉る次第である、故に現時求道學舍の勤行は朝は正信偈念佛和讃六首引を諷誦して、禮讃文即ち三歸開經偈を誦して、先づ歎異鈔を二章各二回繰返して輪讀する次第である、即四人づゝ拜讀する、終りて直ちに御一代聞書を各己人が一章づゝ拜讀する、終りて私が簡單なる信仰的感話を爲して朝の勤行を畢るのである、又晩は就寢前に一同佛前に集りて阿彌陀經念佛和讃を拜誦して後、私が御文を一通拜讀し、一禮の下に各寢に即くのである、是が晩の勤行である、此等の勤行が各々實行さるゝ樣になつた動機を考へて見れは、如來の方便の廣大なることを感ぜずには居られぬ、

私が今最も難有く感ずることは、不思議にも知らず識らず、帝の則に從ふといふ樣な工合、て此尊き歎異鈔と御一代聞書を拜誦するやうになつたことである、而も求道學舍の名號は彰如上人の筆である、其名號を仰ぎて其御敎化に遵ふ樣になつてあるは無意識の一致、故意にあらざる符合、自然の引合せと感謝いたす次第である。この事は今回上人の就職につきて、特に此點につきて感を深くする次第を日曜講話にても話し、又京都市會議事堂の演說にても其所感を披瀝した次第である。

猶色々感ずる所多けれど今此兩書につきて其特徴を擧ぐれば、歎異鈔は絕對の信仰を力强く闡明して殆んと餘地を存せ

ざる次第である、抑〻信仰の言ひ顯はしは一般的の言葉遣より個人的なのが一入感を深くする、歎異鈔には聖人が常に自から名のりて特に際立てゝ申されてある、しかもかくの如き場合もいつも絕對に餘地のなき言ひあらはしてある、即ち「親鸞におきては唯〻念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしとよき人のおほせをかうむりて信するほかに別の仔細なきなり」又「親鸞は父母孝養のためとて一遍にても念佛まうしたることとさふらはず」又「親鸞は弟子一人ももたずさふらふ」又「親鸞もこの不審ありつるに唯圓房おなじこゝろにてありけり」又「されば いかに親鸞がいふことにたがふまじきとは、いふぞ」又「彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり」一として聖人の自督ならざるものはない、信仰の眼中には自分に對する如來の御惠己外は何物もないのである、「愚身が信心におきてはかくの如し、この上には念佛をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも面々の御はからひなりと云云」これ實に歎異鈔一部の上にあらはれたる信仰的の態度である。

偖信仰の上で最も大切なるとは、其信仰が人生の上へ顯はれて働くことである、其點にろきては御一代聞書は爰となき貴き聖敎である、抑〻親鸞聖人の信仰が人生の上に宗敎的團體として實現したのは、蓮如上人によりて大成されたのである、即ち信仰夫自身が遂に宗派として眞面目にあらはれ來るといふことは必要なことである、信仰夫自身に於ては平等なる同信の御同朋御同行であるに過ぎないが、其同信の同朋が集りたところで、茲に眞面目なる信仰的團體が出來るのである、蓮如上人は實に之を實現なされたる人である、世間の歴史家は動もすれば蓮如上人を政治家の如く、野心家の如く誤解してある樣である、其思想は畢竟一向の一揆が起りたときに蓮如上人の子孫及び弟子が傳道せられた地方に多くあり、又其勢力が引續きて石山戰爭にまで及びたものゆへにかく思ふのである、併これ宗敎の團體が眞面目に其天職を保ちて、自立自治を以て立たんとする信仰的精神より實現したのである、戰國時代英雄割據の時に當りて、唯信仰の一を以て自存したのが蓮如上人である、故に其信仰の迫害されざる限りは、決して何等の事も起らぬのである、されど若其信仰に迫害を加へらるゝときは、飽まで其信仰によりて人生の上に力があらはれ來るのが眞面目の信仰である、これ蓮如上人が容易に領解出來ぬ所以である、私なども親鸞聖人は難有くあつても蓮如

上人が分かる迄には一寸暇があつた、歎異鈔は信仰書として適切に感ずるが同様に御文を頂くことは六かしい、即ち歎異鈔が個人的に仰せらるゝ代りに、御文には一般的の御言葉が多い、これ一つは實驗的に味ひ難い點である、そこで同じ蓮如上人の御教化でも、御一代聞書となれば全く個人的である、即ち蓮如上人御自督及其自督より實現し來りたる平素の行動である、是れ歎異鈔と對して、所謂信仰的修養書として缺くべからざる所以である、蓮如上人の御教化を了解するには先づ御一代聞書を熟讀すべきである、其自督よりあらはれたるが御文ゆへに、自然に御文が分かる樣になる、全體御文は言南無者の御釋で貫てある、故に私の經驗を以て言へは、親鸞聖人の信の味を頂き、祈りて法然上人の行の味が分かり、遂に蓮如上人の御文が難有くなつてくる、御文が難有くなつたときには、一般的の言葉が各々個人的に味ひ得る樣になる、即ち各個人の信心が一般的の教化の下に概括さるゝ樣になりて、同信の行者の團體が出來たのが即ち宗派といふものである、是蓮如上人によりて遂に宗派を中興せられたる所以である。

故に宗派を盛んにするとか、團體を強固にするといふことは意識的に、計畫的に、人爲的にするものであると思ふならば大なる誤である、蓮如上人は一代の間、流離間關の中に自然々々に法が興りたのである、御一代聞書のなかに、善從が蓮如上人御迷惑にて、殆んど居所も分からぬ所にあらせられしを見出して、是より佛法は開け申すべしと言はれたといふことである、蓮如上人は眼中計畫もなければ、金錢もなく、名譽もなく、勢力もなく、唯南無阿彌陀佛あるのみである、夫故人が皆其南無阿彌陀佛一つを渴仰して集り來りた結果が知らず識らず宗派を中興せられた所以である。

此に至りて吾人は深く人生と信仰との關係を明らかに了解すべきである、人の信仰に入るときは人生信仰の一つあるのみ、他は何者も認むべからず、人生物質を以て立つべからず、人生勢力を以て立つべからず、人生他人によりて立つべからず、人生自己によりて立つべからず、唯佛陀によりてのみ立つべきである、歎異鈔は此點をきはどく言ひあらはすことが主眼である「親鸞におきてはただ念佛して彌陀にたすけらるべしとよきひとの仰をかうふりて信ずるほかに別の仔細なきなり」このただといふ文字を見落してはならぬ、南無阿彌陀佛のみである、其他の何物をも認めぬのがただである、夫故後に自餘の行をはげむもの、何れの行も及びがたき身なれ

ば、地獄は必定すみかなれ、たとひ法然上人にすかされまゐらせて地獄におちたりともさらに後悔すがべからず候といふことも出てくるのである、親鸞は父母孝養のためとて一遍にても念佛申したること候はずも同樣である、一遍の念佛と雖、我はからひにて申す念佛ではない、いかて之を我はからひに用ゐることを得ん、若し我力にてはげむ善なれば勿論孝養父母の爲にも稱ふべし、されど一聲々々皆如來の御催の外なきを如何にせん、人生唯感謝の念佛あるのみなり、かく如來の御催の念佛なれば、如何に親鸞が人に教えたからとて弟子一人もないと仰せらるゝのである、一々數へ來れば歎異鈔は人生すべてをなげすてゝ念佛を信ずる絕對の信を示されたのである是眞諦門の極致である。

既にかくの如く人生のすべてのものをすてゝ信仰に入るが故に、其信仰の力は人生のすべての力となるのである、眼中衣食なく、物質なく、唯信仰の一つで生き返つた人生であるゆへ、人生のすべてが如來の御惠みである、即ち信仰が人生的に實現するといふが此點である、御一代聞書にあらはれたるは此惠みの人生である、衣の襟を御たゝきありて南無阿彌陀佛、疊をたゝきて南無阿彌陀佛にもたれたる心地すとあるが此點である、人に法を說て喜んだならば、其喜ぶ人よりも猶喜ぶべきなり、何となれば佛智を加へらるゝ御力ぞと仰ぐからである、即ち歎異鈔にある人生を全くすてゝ唯佛の惠一つを信じたる信なればこそ、其信の一つによりて人生悉く南無阿彌陀佛ならざるものはない、衣食住も南無阿彌陀佛、父母妻子兄弟も南無阿彌陀佛、一家も南無阿彌陀佛、一國も南無阿彌陀佛、夫故南無阿彌陀佛の塊の宗門を生じ來りた所以である、これ俗諦門の至極にして、かくして一宗を再興されたる生きた事實が即ち蓮如上人御一代聞書である。

鸞聖人御書

性信房上京に付其たよりに承嘗び入候なり。ます〳〵御信心ふかくおはしまし候由、何事よりも嬉しく候。又かれて予が影御覧の事、此たびよき序と自刻いたし賜り參らせ候。いよ〳〵御信心たじろかせ玉はず御念佛候べし。もしいぶかしき事もおはしまし候はゞ、其地に性信順信その外人々在候へば、よく〳〵御問候べし。いまに我等も存命に候ばこそ此方へも御尋候べし。申さんだけは書て贈候べし。唯何事も御はからひなく如來に御まかせ玉ふべく候。他力には義なきを義とすと申し候なり。能々御心得候べし。穴賢々々。

五月五日　親鸞御判

彌女母方へ　御返事

戀しくは南無阿彌陀佛を唱ふべし我も六字のうちにこそすめ

感謝

晩秋の所懷

嗚呼寂寥なるかな晩秋の景、夕陽西に春きて紅葉色濃かなり、沈思默坐往を追ひ來を想ふ、年々歳々此の如くにして去り、此の如くにして來る、而して其間に幸に慈光の長へに照護ましますありて安らかに如來の淸懷に攝取せらる、嗚呼悠久なること長空の如く、淸澄なること秋晴の如くなるは盡十方無碍の光なるかな、過去の經過を顧みれば護持養育の高恩山嶽よりも崇く、將來の前途を望めば哀愍攝受の希望大洋よりも遙かなり、而して吾人渺として土壤の如く、涓滴の如く微かなり、而して猶此の如く無邊不斷の光益を蒙る、豈感謝の涙なからんや、和讃に曰く、十方微塵世界の、念佛の衆生をみそなはし、攝取してすてざれば、阿彌陀となづけたてまつると、南無阿彌陀佛。

常照の光

煩惱にまなこさえられて、攝取の光明みざれども、大悲もうきことなくて、つねにわがみをてらすなり、我等日夜罪障の雲にさえられて、如來の光を拜したてまつることなしと雖、大悲の親は倦むことなくして、常に我身を照したまふ、何ぞ攝取の心光の大なる、我等遂に其光の外に出づるあたはず、蓮如上人つねに曰く、八萬四千の光明の中に住む身也と、嗚呼我等一たび攝取の心光中の人となれば如何にするも其慈懷を離るべからず、嬰兒の常に母の懷にあるが如し、泣く時も懷にあり、笑ふ時も懷にあり、眠る時も懷にあり、唯何事も知らねども、母の乳房をさぐりて滿足を見出すが如し、我等にとりては稱名念佛こそ如來の我等に與へたまふ乳房なり、我等は稱名念佛の外何事をも知らず、甚しきは時としては其乳房をも忘れて眠り、其乳房をはなして泣く、然れども、大悲の慈懷は常に我身をはなしたまふことなし、嗚呼護持養育の洪恩大なる哉。

御正忌

年々歳々親鸞聖人御正忌の時に至りて肅然として初めて我身を顧みて、懈怠不信の罪を慚愧せずんばあらざる也、時正に晩秋初冬の交、落葉地に滿ちて、寒風衣を吹く、天地淸澄

にして森嚴の氣身に迫る、六百五十年、茫として音容を拜したてまつらずと雖、髣髴として影向の慈恩を蒙る、稱名念佛の響く所、勤行報恩の行はるゝ所、親しく聖人の遺訓を奉じ、跪て尊影の溫容を仰ぐ、往相還相の廻向は常に十方の衆生に賜はり、善巧攝化の矜哀は細かに苦惱の有情を救ひたまふ、嗚呼聖人の出世なかりせば何ぞ大悲本願の正意此の如く人生に明らかならん、聖人の一生は即ち如來の御心を世に實現したまひし事實也、聖人の艱難は五刼思惟を生命として人生に顯はれ來りたる感謝也、聖人は身を以て我等の罪惡を自覺せしめ、身を以て如來の大悲を讃仰せしめたまふ、聖人ありてこそ我等十方の衆生共に同朋兄弟として同一念佛の道を辿り、賢愚善惡の凡聖齊しく如來の大願海に歸入するを得たり、まことに是れ眞宗末代の明師也、若し聖人在さずば五濁惡世の今日、無限大悲の光益何ぞ此の如く光被するを得む、是即ち無明長夜の燈炬、生死大海の船筏也、聖覺法印及び聖人が先師に對する讃嘆は、移して以て我等が聖人を讃したてまつる嘆咏とすべき也、如來大悲の恩德は、身を粉にしても報すべし、師主智識の恩德も、ほねをくだきても謝すべし。

春秋九十年

親鸞聖人が一世を教化したまひし洪恩述ぶるに言語なし、而して吾人が最も偉大なる感想を抱くことは聖人の生涯が古今東西の聖賢中最も長命にして老て益々倦まず、殆んど老の極るをも忘れたまひし點にあり、嗚呼春秋九十年如何に其生涯の長へにましませしよ、大恩敎主大聖釋尊に於てすら八十年の寶齡にて鶴林の雲に隱れたまふ、古來の聖賢基督を除くの外は何れも皆長壽ならざるは少し、然れども聖人の如く九十年の長きに達せる人稀なり、蓋し是れ聖人が從容として光明中に生活したまひしが爲なるべし、吉水入室前の年時を減じ去りて專ら傳道の間、六十年已上に達す、嗚呼偉ならずや、聖人吉水に待すること七年、遂に流罪五年の間、審かに苦勞を嘗めたまひ、猶歸洛せずして東國に傳道したまふこと二十年已上に達す、何ぞ其從容として佛天の御はからひを讃仰したまふことの悠々たる、偏へに是れ彌陀の五刼思惟の願を仰ぎたまへる反映ならんかな、吾人遺弟聖人の御苦勞に對して何等の面目かある、聖人勅免の後二十餘年猶東國に止りたまふを願みよ、如何なる粉骨摧身も聖人の御苦勞の百の一にだ

も足らず、而して歸洛の後約三十年間諄々として誨へて倦みたまはざるもの、畢竟これ大悲無倦の人生に實現したまふもの、吾人何等の幸か聖人の遺訓に遇ふ、踴躍歡喜言ふ所を知らざる也。

覺信尼公御法語

師父聖人兼て御紀念に殘し下しおかれ候廣文類の御伸書、誠に辱く、披き奉るたび毎に身の嬉しさ、心の涼しさ。また

黑谷聖人の御誓言の御中に、唯往生極樂のためには、南無阿彌陀佛と申て疑なく往生するぞとおもひとりて、まうす外に別の子細候はず。誠に愚なる我等女人を御目當の御敎身に余り有難くこそ存候へ。また師父聖人の御言に、自然の御事、彌陀佛の御誓のもとより行者のはからひにあらずして、南無阿彌陀佛とたのませ玉ひて、迎んとはからはせ玉ひたるに依て、行者のよからんともあしからんとも思はぬを自然とは申すぞと聞て候との御敎、身の毛いよだちてありがたくおぼへ候。

講話

願力成就

――（七月十九日求道學會日曜講話）――

近角常觀

上

先日來讃岐の高松に參り、夫より明石、神戸、大阪に立寄り、又江州の鄕里にも寄つて歸つて來ました。此の旅行中には色々有り難い事が澤山有りましたから、初めに其事を少し申上げやうと思ひます。又明日から一寸横須賀に立寄より、夫から姫路廣島の方に參らうと思ひます。

申上げ度い事は澤山有りますが、先づ此度參つた讃岐の高松は御存知の如く屋島に近い所である。屋島は源平の古戰場として名高い所でありますが、殊に今年は屋島附近に青年會が開かれ、風景のよい質素な村で話させて頂いた。斯くの如く景色のよい所へ參つて有り難き御緣に遇せて頂いた事も度々ありますが、殊に一番有難かつたのは、高松より近き丸龜の海岸に、鹽飽島といふ島があります。之は度々いふ法然上人御流罪の地である。實は昨年初めて高松に參るなり、鹽飽島の事を尋ねると、すぐ近いといふ事である。近いといふ事は一昨年來聞いて居て、是非行き度いといふ事も度々言ひ

出したのであるが、海上波荒るゝ時は歸れぬ事があるから開會中は危ないといふ事で、遂に一昨年も昨年も行く事が出來なかつたのであります。讃岐は御存知の如く、弘法大師の靈蹟が非常に多い。此方へは一昨年來善通寺を初め、屏風が浦等隨分參詣させて貰つたのであるが、何う云ふものか法然上人の御舊蹟には御緣が無つたのであります。

緣の熟するのは不思議なもので、今年も參り度い〳〵と思うて居たけれども、中々容易には行けぬ事と思うて居たのである。何うかして一日暇を得度いと思うても、後がつかえてそういふ譯にも行かぬ。すると法然上人が初めて讃岐に上陸なされた所に擢堀といふ村がある。其處は上人が初めて此地に上陸なされて、擢を以て地をお堀りなされた處が、淸水が沸々と湧いて出たといふ村である。其水は今も出て居るのであります。其時上人の御咏として言ひ傳へて居る歌に

南無の船阿彌陀の擢てほる淸水
末の世までも佛々と湧く

親鸞聖人が越後の柿崎で咏まれたといふ「柿崎に宿をしぶ〳〵かりみれば主人の心は熟柿なりけり」といふ歌と同じく、多少狂歌じみてはあるが、實に有難い歌であります。其事蹟を永く後世に傳へる爲に、今度其近傍の有志者が一丈餘りの石碑を立てるといふ事で、夫を或る一人の信者が家貧なれども自分一人で立て度いといふので、今回彌々百五十圓もかゝる石を其人一人で立てる事になつた。其揮毫を或人が頼まれたけれども旨くいかぬから私に書けといふ事である。私も大きい字は書けぬが、折角の依頼であるからと思ひ、其文字を書きつゝ新聞を見ると、鹽飽島へ毎日二度づゝ便船があるといふ廣告がある。此頃は海水浴さへ有つて、朝行つて晩に歸れると書いてある。夫ならばといふので、早速其日の講義を濟ませて出かけたのであります。

島は海上一里程であるが、用事が無い故に一向人も行かぬといふ事である。鹽飽七島とて七つの島から出來て居ります。其中の本島と言ふのが法然上人御流罪の村であります。言ふ迄もなく上人の流罪は初めは土佐國番多と決つて居たのであるが、關白兼實公の御計ひで鹽飽島へお出になり、其地の領主駿河守高階時遠入道西仁の館に寄宿なされたのである。之は既に皆さんが御存知の通りである。

丁度夕方から出かけたの故、海上月鮮かに甚だ心地のよい晩でありました。船は蒸氣船と云ふものゝ、出稼ぎ漁師を載せるごく疎末なもので、御流罪地に參るにはふさはしい小船であります。段々近附いて見ると、如何にも淋しい島で、濱の方に火がほの〳〵と見える。何とも言へぬ寂寥の感に打たれました。同行者は私に外三人で、何れも附近の人々である。共に大層熱心な眞宗の信者で居られたが、鹽飽島へ參詣するのは今度が初めてゝあるとて、私と同行せられたのである。之で見ると其附近の人達でもあまり參詣せられぬと見えます。

着いた時は夜も大分おそかつたので、一軒の宿屋に泊まり、兼ねて手紙を貰つて來た敎員の方と打合はせをしました。翌朝起きるなり早速宿で御禮を上げ、法然上人御和讃と『選擇集』を拜讀しまして、夫から淨土宗の寺に參詣しました。

寺が二ヶ寺あります。一は來迎寺と言つて、海岸の景色のよい所に在つて、確か源信僧都の來迎佛と、山越の阿彌陀佛の繪像がある。大層清らかな寺であります。夫より少し隔つた處に、も一ヶ寺の寺がある。之が西仁房の舘が寺になつたといふのである。來迎寺住職の御案内を得て、其の方へ參りますと、佛前に村民が養蠶をやつて居る。遺物等は檀徒の家に在るといふので、其家を訪ねた處が、其處には上人が石にお彫みなされた南無阿彌陀佛の御手蹟と、西仁房の持佛とが遺つて居た。隨分小さなお像でありますが、其外には何も無い。訪ねて行つて却て私の參詣したのを人が怪しむ位である。親鸞聖人の越後の五地の御舊蹟杯とは丸て趣が變つて居て、人が參つたやうな樣子は少も見えぬ。偶々幾内地方から訪ねて來る者が稀にはあるといふ話であるが、何しろ附近の人さへ知らぬ位故、御舊蹟の形などは全く無いと言つてよいのである。併し私にはよい加減な僞作の寶物杯が有るよりも、遙かに此方が有り難く思はれて、上人が此地にお出なされた當時の御樣子があたりの有樣に明に見えるのであります。西仁房が法然上人を持成して、御到着の晩に藥湯を造つて差上げられた。此時上人が非常にお喜びありて西仁房に渡されたといふ歌に

極樂もかくやあるらんあなうれし
はやまゐらばや南無阿彌陀佛

今日では見る影も無き樣であるが、上人がお出の當時は如何やうであつたらうかと恐れながら想ひ奉つたのである。此時上人は西仁房に事細かに御化導あつて「設ひ念佛に仇をする者にも此の廣大なお惠みは聞かさにやならぬ、常不輕菩薩は杖木瓦石の苦を忍びても四圍の衆生に緣をお結びなされた、其の如く如何なる計り事を廻らしても人を勸めて念佛せしめよ」とて懇々お話が有つたと申す事であります。さて夫より其朝の中に直ぐ出立して歸つて來ました。其附近には瀨戸内海の島が澤山ある。皆綠滴たらんばかりの裝ひをして居るが、用事無き故人はあまり行かぬらしい。上人の當時を偲びつゝ其島影の間を涼しく歸つて來た事であります。夫より初めに申した擺堀の正宗寺に參詣して、茲にも上人の昔を訪ひ、高松へ歸りました。以上は鹽飽島に參詣した大體を申上げたのである。

猶ほ今日は珍らしい事を二三お話致します。之は前年に一度參詣した所であるが、今年も御緣ありて參詣させて貰ひました。夫は大阪から少し行つた處で、河内の國に杉崎といふ方が居られる。此方は先年求道の爲め此の學舍へお出てになつて居た方で、其告白は一昨年の『求道』に出て居ります。其方の寺が大阪汐見橋の停車場から行つて、長野驛の極樂寺といふ寺である。切なる御依賴で一日其のお寺へ參つた處が、是非にもう一日延せといふ事である。何故かと聞きますと、明日は十二日で楠正成が戰死の當日であるから、地方の者に是非に話をして貰ひ度いといふ事である。其處で私も奇緣に感じて一日繰合せました。處が幸にも其附近に磯長の聖德太子の御廟と、守屋御追討の御舊蹟が有つて、御廟の方を上の太子と呼び、御舊蹟の方を下の太子と呼んで居る。幸にして兩方へ參詣させて頂く事を得たのであります。磯長御廟の事は昨

年の求道の初號にも書いて設きましたが、杉崎君の寺から二十町程である。朝早く演說を濟ませて參詣しました。磯長へ行くと何となく有難くて、聖德太子の所謂勝地たる心地がします。御廟は小山であつて、其上には一抔に木が繁つて居る。其の周圍は恐らく二丁も有らうと思はれる位で、夫がすつきり石を以て圍んである。其石は大低一尺餘りの幅の石で、一枚毎に三四行づゝ一寸位の大さで三部經の御文が刻してある。全體で三部經が一廻りする位であるから、可なりの大さである。大抵私の屋敷の廻り位て有つたらうと思ひます。いつも申す如く聖德太子を始め、御母間人皇后及び膳妃を納めた三骨一廟の御墓で、前の方に小さき堂がある。又所謂崛の入口は維新已來蓋がして仕舞うてある。又小山の上には御母間人皇后を葬られた時、其棺の棒を撑されたら生えついたといふ所謂大乘木もある。私は幸ひ『勝鬘經の義疏』を持參して居たから、之を拜讀して一禮を遂げ、夫から周圍を一と廻りして見ました。一昨年參拜した時も非常に神々しき感に打たれたのであるが、今年も實に神々しき思ひがします。餘り人の行かぬ人跡の絶えた所で、殊に後部の方など、寂として何とも言へぬ有難さである。先日は萩野君から私の參る少し已前に、矢張り此御廟に參詣したと言つて、葉書を頂いた事であつたが、何しろ餘り人のごたつかぬ所故、一入有難い。聞く所によれば茲の崛内で弘法大師は百日の參籠をせられて、放光地の第三地を證せられたといふ事である。又親鸞聖人は御存知の如く、此の御廟に於て度々靈告をうけられた。聖人が御入信の最も強き動機となつたといふのは、此廟で受けられた所謂

我三尊化塵沙界　日域大乘相乘地
謂聽謂聽我敎令　汝命根應十餘歲
命終速入淸淨土　善信々々眞菩薩

の夢告である。聖人は拾九歲の時此の御廟で此の靈告を頂かれて、爾來頻りに道を求めなされ、廿九歲の時同じく太子の御建立なされた六角堂の觀世音に參籠して、其靈告によりて法然上人の許に詣うて、他力易行の眞心を決得し給ひたのである。此の事は聖人の和讃を頂くと疑ひ度くも疑へぬ。

佛智不思議の誓願の、　聖德皇のめぐみにて、
正定聚に歸入して、　補處の彌勒のごとくなり。
救世觀音大菩薩、　聖德皇と示現して、
多々のごとくすてずして、　阿摩のごとくにそひたまふ。
無始より此かた此世まで、　聖德皇のあはれみに、
多々の如くにそひたまひ、　阿摩のごとくにおはします。
聖德皇のあはれみて、　佛智不思議の誓願に、
すゝめいれしめ玉ひてぞ、　住正定聚の身となれる。
他力の信をえんひとは、　佛恩報ぜんためにとて、
如來二種の廻向を、　十方にひとしくひろむべし。

其他融通念佛宗の良忍上人も茲に參詣せられ、又日蓮上人も此御廟に參詣してお出になる。實に磯長は日本佛敎の淵源、和國の敎主聖德皇の御遺骸を留め給ひし勝地であります。

夫から下の太子の方へ參詣しました。下の太子は停車場の附近に在つて、さ程に神々しくは無いが、寶物等が澤山にある。中で一番有難く思ふたは、御本尊の所謂聖德太子の本地と申す處の如意輪觀世音菩薩の御像であります。處が今より

廿一年前に大風が吹いて御堂が倒れた事がある。此時此御像も一緒に倒れさせられた處が、意外にも中から小さな金の如意輪觀世音が一體顯れさせられた。之は恐らく百濟から阿佐太子が獻上せられたものであらうと言ふ事であります。夫より轉じて楠公の舊蹟にも參詣しました。楠公の首丘のある觀心寺といふ寺は、直ぐ長野の停車場の近傍であります。此寺は公が自ら監督して建立せられたもので、公は幼時此寺で修養せられたと申す事である。又戰死の時は一族を茲に殘されたと申す事である。色々公の遺物抔も拜見し、又其の墓所へも參詣させて頂いた。丁度公の忌日に來會はせて、斯く墓所に參拜する事の出來たも、深き御緣であらうと想ひます。又其上の　後村上天皇の檜の御陵へも參詣させて貰ひました。

已上は今日の講話に別に關係がある譯ては無いが、私が今回の旅行中に出遇はせて頂いた有難き御緣の一二をお話致したのであります。斯の如く旅行中も到る處佛の御導きならざる處は無い。地方へ參つて話す私も、聞いて下さる方々も、皆佛の御方便に催うされて居るのであります。之より彌々今日の題目なる『願力成就』に就きて、お話致さうと思ひます。

下

今日の講話題の「願力成就」といふ事は、是れ亦私が今度讃岐へ參つて、八日間の講話の要點でありまして、其積りて出したのであります。讃岐で八日間の講話は、親鸞聖人が晩年の御製作にかゝる『二門偈』と申す偈文の講義と、夫れから聖德太子の十七憲法に就きてお話致したのでありました。何しろ八日間に亘る講義でありました故、讃岐では隨分色々の事を話しましたが、今日は其八日間の講義の最要點を聞いて頂き度いと思ふのであります。

抑親鸞聖人が晩年に於て『二門偈』を作つて、何をお示し下されたかと言ふに、天親菩薩に『淨土論』といふ御聖敎がある。其又『淨土論』の意味を註釋なされて、曇鸞大師に『論註』の御著作がある。此の二つの御聖敎によらせられて、『淨土論』の五念門及び五功德門に顯はれてある入出の二門といふ事は、即ち我々が極樂に入つて、又此の世界に還つて來る、此の入出の二門といふ事は、即自利々他の二門の行爲といふ事は、之は我々が自分で出來るのぢや無い。もともと佛が之を成就して置いて下されたから、其のお力で我々が之を頂く事が出來るのであるとお示し下されたのであります。聖人の『和讃』に

天親菩薩のみことをも、　鸞師ときのべたまはずば、
他力廣大威德の、　心行いかでかさとらまし。

とある。之は天親菩薩の『淨土論』も、若し曇鸞大師の『論註』がなかつたなら、我々は其中にお示し下されてある他力廣大威德の心行の眞味を知らずに仕舞つたらうとお喜びなされたのであるが、其の『淨土論』の中には何が說かれてあるかといふに、一心五念と言つて、一心の信念から五念門の五つの行が出て來るといふ事がお說きなされてある。之は昔から一拳五指と言つて、一の拳から五本の指を出すに例へたものである。其の五つの行といふは、所謂禮拜、讃歎、作願、觀察、廻向の五である。此の五念門の行が一心の信心より自然に現はれて來るといふ事を說いたのが、即ち天親菩薩の『淨

土論』であります。處が此の五念門の行を、若し曇鸞大師の『論註』の御導きが無かつたなら、我々は衆生の我々の行と考へて、他力廣大威德の心行である事を氣就かなかつたに違いない。此事を天親曇鸞二師によつて最も力强くお示し下された物が親鸞聖人の『二門偈』である。『二門偈』を一言に言ふと先づ斯うであります。

猶ほも少し叮嚀に言ひますと、一心とは何かといふに天親菩薩が『淨土論』の初に於て、釋尊を呼びかけられて、

世尊我一心　歸命盡十方　無碍光如來　願生安樂國

と仰せられてある。即ち世尊よ、我は一心に盡十方無碍光如來の廣大なる御親に歸命して安樂國に生れんと願ずるといふ天親菩薩自督の信心を述べさせられた此の一心であります。此の一心の信念から今いふ五念門の行が顯はれ來るので、即ち第一に阿彌陀佛に歸命する禮拜門である。第二に南無阿彌陀佛の名號を稱ふる讃歎門である。第三に安樂國に生れんと願ずる作願門である。第四には又此の心から極樂淨土の七寶莊嚴を心に想ひ浮べて樂む觀察門である。『淨土論』を表面から言うと、實に斯の如き意味に說いてあるのてありますが、處が之をば曇鸞大師の『論註』に行くと、も一つ他力といふ事に力を籠めて說いてお出になるのである。夫は何うかといふに、大分話か六ヶ敷くなつて來ますが、曇鸞大師が他力に就きて殊に力を入れて說いてお出になるのは、第五回の廻向門である。此の廻向門から他力といふ事が起つて來るのであります。

夫は何うかといふに、先づ「淨土論」の中に、

菩薩は四種の門に入つて自利の行成就し給へりと知るべし。菩薩は第五門に出て〻廻向利益他の行成就し給へりと知るべし。菩薩は是の如く五門の行を修して、自利々他して速に阿耨多羅三藐三菩提を成就する事を得給へるが故に。

とあつて、初の禮拜讃歎作願觀察の四門は自利の行てある。最後の廻向の一門は利他の行てある。而して曇鸞大師は『論註』に於て、此の利他の釋の下に全力を盡して他力といふ事を言つてお出になるのであります。今其文を拜讀して見ると、先づ初に『淨土論』の文を引いて、

問て曰く、何の因緣有てか、速に阿耨多羅三藐三菩提を成就する事を得と言へるや。

といふ問ひを設けて、

答て曰く、論に五門の行を修して、以て自利々他成就し玉へるが故にと言へり。然るに覆に其本を求むれば阿彌陀如來を增上緣と爲るなり。他利と利他と談ずるに左右有り。若し佛より言はゞ宜く利他と言ふべし。衆生よりして言はゞ他利と言ふべし。今將に佛力を談ぜんとす、是の故に利他を以て之を言ふべし、此の意也。凡そ是れ彼の淨土に生ると、及び彼の菩薩人天所起の諸行は皆阿彌陀如來の本願力に緣るが故に。

とあつて、「普通ならば自利に對して他利と言ふべきである。然に他利と言はず、利他と言つたは、佛よりして衆生の他を利益して下さるのてあるから利他である。若し之を衆生の方から言ふなれは、佛の他に利せらるゝのてあるから他利と言ふべきてあるが、今は佛力を談ぜんとするのてあるから、利

他と言ふべきである。『淨土論』に利他と示されたは、佛よりして衆生を利益して下さる此の佛力を現はさんが爲である。」と言つてお出になるのである。而して其佛力とは何かといふ事になつて直に次に、

何を以て之を言ふとならば、若し佛力に非ずは四十八願便ち是れ徒に設け給へらむ。今ひとしく三願を取つて用ゐて義の意を證せん。

と言つて、「其の佛力である證據は阿彌陀佛の四十八願である。今其中の三願を取つて此の意を證せん」といふので次に第十八願の文を擧げ、「此の佛願力に緣るが故に我々衆生は速に三界輪轉の事を免れ得るのである、是れ一の證である。」次に第十一の願文を擧げて「此の佛願力に緣るが故に我々衆生速に安樂國に生るゝ事を得るのである、是れ二の證である。」次に又第二十二の願文を擧げて「此の佛願力あるが故に我々衆生速に一生補處に到り、再び諸佛國に遊びて普賢の德を修する事を得るのである、是れ三の證である。斯の如く四十八願、皆な一々佛力である證據である。して見ると我々が往生を得るのは、全く阿彌陀佛の本願力で行けるのである。」と言つてお出になるのであります。而して此の第十八願は信である。第十一の願は證である。第二十二の願は還相廻向である。親鸞聖人の『敎行信證』は之が根底となつて現はれ來るのであります。

一體廻向といふ事は『淨土論』に於ては、衆生が他に向ふ時の意で書いてあるのである。夫を斯くの如く曇鸞大師は佛が我々に向うて下さる利他の行であるとお示し下されたのである。其處で其廣大なる佛のお惠みを喜ぶ所から、之を他に向うて話する意味が廻向であるが、此の如く我等が人を導くことが出來るのは、本此の佛の廣大なる利他の御廻向に催うされて、自然に我々の上にそういふ風は顯はれて來て下さるのである。廻向門のみでなく、初の禮拜も讃歎も作願も觀察も、皆な此の佛の利他廻向がもとになつて、我々の上に自然に斯く佛の方より顯はれて下さるのであります。併しながら之は、も一つ奥の方から申さねばならぬ。夫は何かと言うに、既に『淨土論』に自利々他と並べ擧げさせられた中の、利他の文字が佛力を顯はしたものであれば、自利の文字も又佛の自利を仰せられた文字でなければならぬ。即ち利他門の廻向が佛の廻向である如くに、自利門の禮拜讃歎作願觀察の四も、矢張り佛の禮拜、佛の讃歎、佛の作願、佛の觀察といふ事になるのである。之は他力信仰上非常に味はひの存する點であります。其處で成程我々が信仰に入れば、自然に禮拜もし、讃歎もし、作願觀察もするやうになるのであるが、之も源を言へば抑佛が衆生の爲めに禮拜し讃歎し作願觀察して置いて下されて、之の功德を以て我々に廻向して下さるからである。我々が佛を拜み南無阿彌陀佛を稱へ、極樂往生を願ふ前に、佛既に我々の爲に禮拜し、讃歎し、作願し、觀察し、廻向して置いて下さつたのである。此の廣大なる佛の御廻向あればこそ我々凡夫の心中にも念佛も稱へられ、人にも喜びを分つ如き念を生ずるのである。茲に於てか『淨土論』の五念門は、本々佛が我等が爲に成就したまひし如來の五念門であるといふ事になるのであります。其處で親鸞聖人は『二門偈』に如何

に示されたかと言うに

不可思議兆載劫　漸次成就五種門
何等名爲五念門　禮讃作願觀察廻
云何禮拜身業禮　云何讃歎口業讃
云何作願心常願　云何觀察智慧觀
云何廻向心作願　不捨苦惱一切衆
廻向爲首得成就　大悲心故施功德
娑婆樂頭菩薩論　本師曇鸞和尙釋
願力成就名五念　佛而言宜言利他
衆生而言言他利　當知今將談佛力

話が大層難かしくなりますが、道筋だけを申しあげます。淨土論の上に一心の信心より顯はれ出づる五念門の行が上げてあるが、抑々其源を尋ぬれば、阿彌陀佛法藏比丘の昔、不可思議兆載永劫の間に修行したまひて、御成就下されたのが、即ち此五念門であります。全體行者の上に顯はるゝ五念門を、如來の成就なされし五念門ぢやと云ふ事は、一應考へると頗ぶる飛び離れた考の樣に思へるが、深く考へれば、實に意味の有る事であります。今五念門の上で申せば、隨分思ひ切つた云ひ方の樣に聞こえまするが、若し之を他力の大信大行と云ふ上で申せば、能く解る事であります。大行と云ふは、無碍光如來の御名を稱ふるのであります。去りながら、其大行は行者が稱へる時に始めて出來たのでは無い、もと〳〵如來の選擇攝取して成就し給ひたる如來の大行である。故に親鸞聖人は第十七願に於て、如來は既に此行を成就し給ひてある。是が即ち他力の大信大行である。殊に注意すべき點は、行と云ふ事を以て、我等が行ふ處の行に非ず、行と云ふ行は皆如來の御成就なされし行にして、是を行者に廻向して下さるのであります。故に今五念門の行も行者の起す處の行ではない、阿彌陀如來、不可思議、兆載永劫に漸次に御成就下されし五念門ぢやと御示し下された。是れ「願力成就を五念と名づく」と仰せられた點であります。

そこで『二門偈』の本文には事細かに法藏菩薩が御修行なされし事實にかけて示されてあります。親鸞聖人は屢々御本書に、茲を以て如來不可思議兆載永劫に菩薩の行を行じ給ひし時、三業の修し給ふところ、一念一刹那も眞實ならず、淸淨ならすといふことなし」、と仰せられし如く、五念門も如來の三業の上に歷々と事實的に示されてあります。そこで先づ初めに禮拜門を上げて仰せられるに「云何んが禮拜する、身業に禮したまひき」と。全く如來が我等が爲に永劫の間禮拜門の御修行をなされし事を御示し下された。偖其如來の御苦勞の結果は如何に我々に顯はれるかと云ふに、次の文に「阿彌陀佛正遍知、諸の群生を善巧方便して、安樂國に生ずるの意を爲さしめたまふが故に」あります。即ち如來が永々御苦勞の御念力が我等に屆いて、遂に如來善巧方便の御催を蒙りて、初めて我等が如來にふりむいて安樂國に生ぜんとの意を起さしめ下さるのである。そこで今迄佛を禮拜したことなかつたものが、如來を禮拜するの意を生ずるのであります。殊に注意すべきは善巧方便の文字であります。即ち和讃に、釋迦彌陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し、われらが無上の信心を、發起せしめたまふといふと同意であります。又信卷別序に、眞心

を開闡することは大聖矜哀の善巧より顯彰せりとあるも同樣であります。度々御話する如く、善巧方便といふことを輕々しく見てはなりませぬ。即不可思議兆載永劫已來合掌禮拜したまひて、我等が爲めに念じたまひし御心より種々の善巧方便を蒙るのである。是が入の第一門で、如來は其禮拜の因の五念門と共に、果の近門をも成就したまひて下された。此如來の御引寄せによりて、いよ〳〵我等が如來に近づきて御緣を結ぶ樣になつたのが即ち近門である。此の如く因も果も皆如來が我等が爲に成就したまひたのである。之を御本書でみれば證の果も亦如來の廻向である。即ち「若しは因、若しは果、一事として如來淸淨願心の廻向成就したまふ所に非らざることあることなし」といふと同樣の意味であります。何から何まで皆如來が我等が爲に御成就下されたのであります。

次が讃嘆門であります。「云何んが讃嘆する、口業に讃したまひき」即ち稱名念佛する讃嘆門は、抑々如來が因位の時に業に讃じたまひしもので、即如來の成就であります。即大信大行の大行であります。其如來の御成就の結果によりて、我等が稱名が出來るであります。されど唯口に稱ふるばかりではない、名義に隨順して稱ふるのであります。即名號の謂はれを聞き開きて稱ふる念佛であります。即光明名號の御催によりて信心決定して稱ふる念佛であります。而して特に此下には「則斯無碍光如來、攝取選擇本願故」と仰せられてある。即大行の稱名は本々如來が選擇攝取して我等が爲に成就したまひし念佛である。是既に度々繰返したるが如く、五濁惡世の我等、破戒無戒の人、無智小智、貧窮困乏の人の爲に念佛の一を選擇攝取して本願を建てたまひたのである、即此の如き我等を憐みたまひて其者を救ひたまふ本願であります。此如來の本願を聞き開きた一念に、現生に正定聚に住し、同一念佛の大會衆の數に入る結果を頂くのであります。

第三が作願門、是亦如來の作願であります。即ち如來が本願をたて〻我等を助けんとのて作願あります。其如來の淸淨願心に催されて、我等が願生安樂國との心を起すのである。そこて其結果として蓮華藏世界に生れさしていたゞいて、諸の煩惱惡業の消えはてた寂靜無爲の境界に入らして下さるのであります、此の如き境界に入ることの出來るのは、本々如來が我等を極樂に往生せしめんとある如來の作願があるからであります、そして其如來の願心が我等に屆いて下さればこそ、我等が如來の淨土に往生したいとの願心も生ずれは、亦如來がかねて御願ひ下されし如く、必す寂靜無爲の樂に入りて、親しく眞如法性といへる目醒めたる如來夫自身の境界に入ることが出來るのであります。西方寂靜無爲の樂には畢竟消遙として有無を離れたり、是即ち極樂無爲涅槃界の結果であります。恰も親に背きて居つた小供が、親の慈悲によりて初めて親の許へ歸る樣になつたのが、愈故郷に歸りて我家の門に入り、我宅に入りて、親に面會して、親しく其恩を感謝する如く、我等も無始已來全く如來の惠みに背きつゝあつたものが、初めて如來の許に往生して御目にかゝるが如くであります。之を入の第三門と名け、又宅門と名くる所以であります。

次が觀察門、是亦如來が因位の昔、智慧を以て觀じたまひた。即此如來の御苦勞によりて我等は如來の淨土の有樣を思

ひ浮べて、ウラ〳〵と喜ばして貰ふのが觀察門であります。其結果遂に極樂淨土に往生して見れば、果して種々の莊嚴、種々の法味樂を以て滿たさるゝ境界に入らして下さるのであります。即淨土の宅に入りて見れば、一家團欒、種々の御馳走やら、種々の談話やら、其樂極まりなきことであります。善導大師二河白道の喩に、「西岸上に至れば善友相見えて慶樂することと極なし」と仰せられたところが、此淨土の樂であります。其淨土の樂を待設けて、はや此世界より思ひ浮べて喜ぶのが、信心歡喜の上よりあらはるゝ觀察門であります。「信心歡喜といふは、信心すでに定まりぬれば、淨土の往生は疑なく思ふて喜ぶ心なりと仰せられた。さて此の如く淨土に往生して喜びを享くる有樣は故郷に歸りし子供が一家の團欒して喜ぶ如くであります。故に之を屋門と名くるのであります。已上の四種の門は如來が自ら禮讃、作願、觀察の行を自ら行ひて、我等に與へんとて成就したまひし、即自利の功德であります。此如來の成就あればこそ、我等が之を頂きて極樂淨土に往生さして貰ふ入の功德を成就して下さるのであります。

最後が即ち廻向門であります。是如來が我等が爲に御成就下されし御廻向であります。常に申すことでありますが、淨土眞宗といふことは此如來廻向といふ一語の中にこもつて居るといふも、決して過言ではありませぬ。抑々廻向といふことは『淨土論』の本文の上より見るときは、五念門が皆淨土往生の菩薩が自から行ふところの行なれば、廻向も矢張り他の衆生を救はんとする行者の廻向になつて居ります。しかるに此御話の初に詳かに御話し申した通り、曇鸞大師の他利利他の御釋から伺ふといふと、利他といふは如來の方より我等を利したまふことじや、本願力を增上緣とするのじやと仰せらるゝ。して見れば畢竟するに如來の利他といふことじや、故に結局廻向も如來の廻向が根本じや。そこで『淨土論』の上では行者の廻向と見えるところの文を、全く如來が我等がために御苦勞下さる文と變りてくるのである、即ち「如何んが廻向したまへる。一切苦惱の衆生を捨てたまはずして、心に常に作願したまはく、廻向を主として大悲心を成就することを得たまふが故に」と仰せられた。和讃に、

如來の作願をたづぬれば、苦惱の有情をすてずして、
廻向を首としたまひて、大悲心をは成就せり。

と仰せられたが此如來廻向を力强く示されたる御敎化であります。

五念門皆如來願力成就と申されたのであるから、同樣には違ひなけれども、其方向變換の出てくる源は、此廻向門が其車軸の中心とても申すべきであります。即ち行者の廻向ではない、如來の廻向であると、全く全體の舞臺が變りてしまつたのであります。かねて度々繰返すことであるが、行者の自力の廻向ではない、如來利他の廻向であると云ふのは、信仰問題於て最も肝要とする所であつて、即ち律法主義を一變して、信仰主義に入る所である。かねて度々言ふところの大乘小乘、若しくは難行易行、聖道淨土、自力他力の別を生ずる如く、迚ても我等が先づ自力で實行成就することは出來ぬのであるが、此の如き者に對して、大悲心を成就したまふたのが如來廻向である。即何を廻向じたまふかといふに、我等が爲

に禮拜讃歎作願觀察の成就したまひし自利の行を我等に廻向したまふのであります。其御廻向の御蔭て我等は淨土に往生することが出來るのてありますから、之を往相の廻向と申されたのであります。若し『淨土論』の本文の如く廻向といふことを行者の廻向といふことにするならば、往相の廻向といふことは、行者が淨土に往生するまてに他を救はんとすることになり、還相の廻向といふことは、淨土から歸りて衆生に廻向するのてあるといふことになる。しかるに親鸞聖人は根本的に廻向といふは我等が廻向することてはない、如來が我等に廻向したまふことてあると、ハッキリと御示し下された。故に往相の廻向といふことは、如來の廻向によりて我等を淨土に往生せしめたまふことてある。還相の廻向といふことは、是も如來の廻向によりて我等を淨土より衆生濟度の爲に再ひ娑婆に還來せしめたまふのじやといふことになる。そこて、此廻向といふが畢竟他力の淵源となり、又往相、還相といふは、我等が淨土に往生し、又淨土より還來するといふ何もかも皆如來廻向てあると示されたことて、實に他力眞宗としては此上もなき要點となります。そこて『廣文類』には、

謹案二淨土眞宗一、有二二種廻向一、一往相、二還相、又就二往相廻向一有二眞實敎行信證一

と云ひ、『略文類』には

然本願力廻向有二二種相一、一者往相、二者還相、一言二往相廻向一者就二往相一有二大行一亦有二淨信一云云

と仰せられた。殊に和讃には

彌陀の廻向成就して、　往相還相ふたつなり、

これらの廻向によりてこそ、心行ともにえしむなれ。

往相の廻向ととくことは、　彌陀の方便ときいたり
悲願の信行えしむれば、　生死すなはち涅槃なり。
還相の廻向ととくことは、　利他敎化の果をえしめ、
すなはち諸有に廻入して、　普賢の德を修するなり。

かくの如く淨土眞宗の根底は、此彌陀如來本願力の廻向といふ點から顯はれ來りたのであります。そこて行者の廻向なれば往相廻向の因によりて還相廻向の結果を得たと云ふことになるのてありますから、他の四念門及四功德門と同樣てありますが、如來の廻向といふことになると、上の和讃にある通り、他力の信行を得るまてが、皆此廻向の一つから頂くのてありますから、畢竟一心も五念門も五功德門も此往相還相の廻向によりて頂くといふことになるのてあります。即ち往くも還るも何れも皆如來の廻向じやといふことになります。即ち若しは往、若しは還、一事として如來淸淨願心の廻向成就したまふ所に非ることあることなしとあるが此意てあります。

さりながら五功德門の順序として此に深きありがたき意味があります。即上に申したる宅門と云ひ、屋門といふは、極樂淨土の家庭に歸りて、一家團欒して樂み極まりたる有樣てあります。そこて話すべきことは話し、頂くへきものは頂き、滿足の餘、庭園を散步するが如く、花園の香はしきあり、深林の快きあり、以て自由自在に逍遙遊戲するが如く、衆生濟度にあらはるゝが還相の廻向てあります。そこて菴林遊戲地門といふ名の來る所以てあります。即生死の菴、煩惱の林に應化身を現じ、諸の善巧方便を以て衆生濟度が出來るのてあ

ります。そこて此巧みなる譬喩は單に言葉ばかりを巧みにしたのてはない、深く佛敎の根底に徹したる佛境界てあります。抑々宅門屋門の味といふは、極樂の眞實證の有樣てあります。眞如法性のさとりてあります。眞如法性のさとりといふは、諸の煩惱根本の無明の醉がさめて夢がさめて、本覺明了の佛境界に入りた有樣てあります。サ、果して夢がさめ、醉がさめたなれば他の醉へる人を覺まし、他の眠れる人を覺さねばならぬのてあります。若し我獨り醒めたり、我獨り澄めりといふ樣に超然として居られる佛境界なれば、眞の悟てはない。必す衆生濟度の働をせずには居られぬのてあります。故に往相の廻向の結果は必す還相の廻向がなければならぬのてある。菴林遊戲地門といふは喩ばかりが立派なのてはない、必ずかくあらねばならぬのてあります。しかれば眞の悟りには衆生濟度は附物てあるから、宅門屋門の眞如法性のさとりあればよいてはないかといふに、そうてはない。我等が此悟を得るも衆生濟度の出來るのもひとりてはない、自然てはない、否自然は自然じやが、願力の自然じや、所謂願心の廻向なればこそ利他の行が成就して下さつたのじや。そこて『二門偈』にも「以二本願力一廻向一故利他一行成就應知」と仰せられた。又和讃にも

南無阿彌陀佛の廻向の、　恩德廣大不思議にて、
往相廻向の利益には、　還相廻向に廻入せり。
往相廻向の大悲より、　還相廻向の大悲をう、
如來の廻向なかりせは、　淨土の菩提はいかゞせん。

と仰せられたも畢竟、南無阿彌陀佛の如來廻向によりて我等に與へたまふにより、我等は往相廻向の御利益を蒙りて、淨土にて眞如法性の悟を聞けば、次は還相廻向の御利益にて、他の迷へる人を濟度さして下さるといふことてあります。迷の夢や醉をさまして下さるばかりてはない、他の夢をさまさずには居られぬ、他の醉をさまさずには居られぬ樣にして下さるのてあります。

斯の如く『淨土論』の上に於ては淨土往生の菩薩の五念門といふ事を『二門偈』に於ては法藏菩薩の上に就きて申されてある。といふ事は一見すれば頗る思ひ切つた、寧ろ破格な事のやうに思へるけれども、能く〳〵考へて見れば、決して無理な事ては無い。夫は何かといふに、前來申すが如く佛の眞如法性の境界に入れば、決して冷然として一切衆生を見る事は出來ぬ。必す他の衆生に對し、慈悲を起し智慧を起し方便を起して衆生濟度をする事になる。此の點を『淨土論』及『論註』に、慈悲門智慧門方便門と稱して淨土往生の菩薩が還相廻向の力によりて衆生濟度下さるゝ事が示されて居る、故に同じ親鸞聖人でも『證の卷』には還相廻向の菩薩の德として之を出してある。併し前にも言ひしが如く既に往相還相共に如來の力に緣りて廻向せられるのてある。其如來の根源に遡りて見れば如何てあるか。其如來は如何にして顯はれ給ひしか。即ち一如法界の都より法藏菩薩と名乘らせ給ひて衆生濟度の姿を顯はされたのてある。即ち眞如法性の境界所謂本覺明了の御悟が法性法身てある。其法性法身の境界より智慧と慈悲との御力によりて衆生濟度の御姿即ち、他の無明の闇に眠り、三毒の酒に醉うて居る我等を呼ひ起さん爲めに、願を

立て行を起し、呼びかけ給ふ御姿が即ち方便法身である。斯く頂いて見れば我等が宅門屋門の眞如法性の境界に入れば、衆生濟度の園林遊戯地の利益を得る事は、もと〳〵法藏菩薩が一如法界の都より姿を顯はし給ひし廣大な御蔭である。既に其筋道が同じてある事は申す迄も無いが、猶ほ心を着けて頂かねばならぬのは、筋道が同じいからとて淨土往生の菩薩を法藏菩薩とせられたのでは無い。抑我等往生の行人が何等の力も無くして斯の如き境界に入らせて貰ふは、全く此の法藏菩薩が一如法界より姿を顯はし給ひて御苦勞下されし五劫思惟の願、不可思議兆載永劫に漸次に御成就下された願力成就の五念門の御力であるぞと、本願力廻向の根本にまで遡上りて示されたのが『二門偈』であります。故に『二門偈』では、智慧も慈悲も方便も皆法藏菩薩の我等に對して起させられた事を示された。即ち

無礙光佛因地ノ時　發スヲ斯ノ弘誓ヲ建ツ此ノ願ヲ
菩薩已ニ成シ智慧心ヲ　成シ方便心无彰心ヲ
成ニ就ノ妙樂勝眞心ヲ　速ニ得レ成ニ就スルコトヲ無上道ヲ
成ニ自利利他ノ功德ヲ　則チ是レヲ名ヲ爲ニ入出ノ門ト

とある。斯の如く頂き來れば自利々他共全く如來の自利々他にして、入出共に悉く如來の我等に廻向し給ふ處であります。故に『二門偈』の下の文に「入出二門を他力と名く」とあります。斯の如く述べ去り述べ來れば、五念門の行悉く願力成就である事は少も疑ふ事は無い。唯々如來廻向の廣大不思議なる事を感謝するばかりであります。殊に注意すべき事は、此の如來の廻向といふ事は、此の人生と離れずに頂かねばならぬ。前に引きた『御和讃』にもある如く「往相の廻向ととくことは、彌陀の方便ときいたり」、とある。實に時到りてある。又還相の廻向にして見れば、親鸞聖人が聖德太子の御恩を喜ばれて「多生曠劫この世まで、あはれみかむれるこの身なり」と喜ばれた。即ち我等が實に同樣に此の御哀みを蒙ると思へば、如何にも有難き極みであります。此の如來二種の廻向は常に我等ひとり〳〵の上に蒙りつゝあるのである。私が此の度四國へ參りて、而も三年同じ高松に於て御緣を結び、此の『二門偈』の話をさして頂いたも、又青年會の講習會の爲めに一旦歸京して諸君にお會ひ申し、此の法味を共に味ふも皆如來の御催し、方便時到りて、此の二種の廻向を頂くのであります。誠に是れ「護持養育たえずして、如來二種の廻向に、すゝめいれしめおはします」と感謝致さねばならぬ。

以上願力成就の五念門の行に就きては、充分御話を致しました。其處で此の如來の成就を頂く一心の信に就いて一言致します。今『二門偈』の初にも

世親菩薩ハ依テ大乘　修多羅眞實功德ニ
一心ニ歸ニ命シ盡ニ十方　不可思議光如來ニ

とある。即ち申す迄もなく『淨土論』の初を移したのであります。一寸一言平日より感じて居る處を申しまするに、親鸞上人は六字名號と並べて、天親菩薩の歸命盡十方無碍光如來曇鸞大師の南無不可思議光如來の十字九字の名號を御尊崇なされし事は誰も知る處なるが、今不思議にも『二門偈』には此二名號を合併して十二字の名號、即ち歸命盡十方不可思議光如來と仰せられてある。是れ實に天親曇鸞を合併したる親

鸞聖人の特別の御名號と拜し奉る次第であります。偖て其の如來に對して、一心に歸命し給ふのが、天親菩薩の自督であります。而して此の天親菩薩の一心は決して高尚な一心ではない。上來述べ來る如く如來本願力の御惠み、我等罪障の凡夫の爲に御苦勞下されし御惠みを受る一心であります。故に和讃に

論主の一心といけるをば　曇鸞大師のみことには、
煩惱成就のわれらが　他力の信とのべたまふ。

即ち曇鸞大師が、孝子の父母に歸し、忠臣の君后に歸して動靜己に非ず、出沒必ず故あるが如く、恩を知りて德を報ずと仰せられた。即ち如來の御恩を頂いて、其本願招喚の勅命に從ふのが、一心歸命であります。前に言ふた和讃に「天親菩薩のみことをも、鸞師ときのべたまはずば、他力廣大威德の、心行いかでかさとらまし」と仰せられたは、實に此の五念も一心も皆な如來の威神力を加へて下さるればこそ我等が頂く事が出來るのである。曇鸞大師が「若し如來威神を加へ給ふにあらずんば、將何を以てか達せん」と仰せられたのが是であります。已上申し述ぶる處淨土眞宗の骨目、敎行信證の精髓であります。故に『證』の巻の終に

論主は廣大無碍の一心を宣布して、普徧く雜善堪忍の群生を開化す。宗師は往還大悲廻向を顯示して、慇懃に他利々他の深義を弘宣せり。

と仰せられたは、實に其極致であります。

告白

唯佛のみ眞實也

後藤辨宏

私は生れは岐阜縣でありまして、現今は福井縣敦賀在に住居致し居る者であります、元來私は眞宗の門徒の家に生れた者でありまして、因緣有りて十才の時淨土宗の寺に貰はれまして、得度をも受け進んで一宗の學校へも入り、幾分宗義の何たるをも學び、他力本願の不思議なることを承知したのである、そして遂には祖師傳來の血脈をも相承して、更に角一宗の能化師たる分濟位地を得まして、衆生濟度の大任に當る宗敎家の資格を得たのでありました、そして多年他に向て如來の慈悲救濟を宣布し來たのである、處が自分の內心に於ける信念狀態は如何であるかと吟味すれば、全く自分は世の人を欺て居りしことを、今日にいたりまして、發露懺悔するのであります、それは自分は元より如來本願の尊きいはれ、慈悲のありがたきことなどは、承知はいたしてをれど、其精神の上には決して確固たる信念があるのではなく、心の奥底より安心して法悅に入りし信仰生活などは、毫もなかつたのである、さすれば私は全く自信なくして人に信を强ひつゝありし者でありまして、極言すれば私は如來の法を賣りつゝありし者であつた、それを今日から追想いたせば、誠に身のおき所

もなく恐怖を抱て懺謝するのであります。此の無慚なる行爲は、私が宗教に身を投じてから昨年の二月まで、約十二ヶ年間の狀態でありました。そして私は身體は纖弱の質でありましたけれど、平日の境遇は多く順境の方でありました、それ故に世間の逆境とか、苦勞などは、余り知らずに暮し來たのでありました。

處が昨年の一月最初は少しの寒冒の氣味でありましたが、だん〳〵惡くなりまして、遂には二三回も澤山に喀血する程になつたのである、醫師の診斷も全く肺結核と云ふことでありました、私はかねて肺が弱いと云ふことは承知しぬたれど、今更此の重症に陷たことを、深く驚たのである、そして最早や萬事休せりとの失望の涙に暮れたのでありました、然し平生如來の御慈悲を傳ふる僧侶としては、大に覺悟いたす時は此時であると、無理にも御稱名を唱へつゝぬたのであつた、されど何んとなく死にともない、如何かして今一度恢復がして見たひと云ふ慾望が續々起て參りまして、前途は全く闇黑の幕に閉されたる心持になりまして、終には無理にも御慈悲を悅ぶ心などは毫も發らぬ樣になつたのである、そして病氣は日々不良に進み、加ふるに脊髓炎まで併發すると云ふ容態になりまして、看護し呉るゝ人達も最早や駄目であると覺悟したのである、然し病人自身は是非一度全快がいたしたいと云ふ一念に驅られまして、精神は全く苦悶に苦悶を重ね、或夜の如き有頂天に病氣を忘れて、家外に飛出して、看護人を驚かしたこともありました、そして尙ほ此上に、今一の苦悶を重ぬる事件が起たのである、それは私が曾て人から依頼を受けしことなのである。其事件の眞相は要するに人の爲になること、即ち人を悲境より救出すと云ふ事柄で有て、全く自分は不正義のことでないと信じてゐたのである、處が此事件には彼此と反對者が有て解決を見ることが出來なかつた、然し自分が病氣に罹てよりは、是非とも生前中に、其約を果してやりたひと決心したのでありまして、そして病中ながら斷然依頼者の意志を實行せしめたのである、處が果して其のことの實行を好まぬ方面の人々より、大に異議を申込まれたのである、其結果此れまで兄弟の如く親みし友人知己など、全く私に面を背けるように成たのである、殊に今まで自分が多少力になりてやりし者までが、私の所へ寄りつかぬようになつたのである、私は此時全く世の中より見捨てられ、投出されたのである、此時此際の私の心中の苦痛煩悶は、到底筆や口にあらはすことは出來んのである、今や死に瀕する病人でありながら、惡業强くして、如來救濟の御手に觸るゝことも、慈光の御惠をも戴くことも出來ざる苦痛狀態であるところへ、一方世間の人からは一種の迫害的仕打を向けられ、誰一人として一言の慰籍を與へ呉るゝものもなく、全く內外失望の底に沈みし當時の苦痛狀態を、今日から追想して見ますると、自分は全く自暴自棄して一種の狂氣的に陷たのであつた。

然るにありがたきことには、佛未だ私を見捨てたまはず、宿善開發の一道の光明を、仰ぐことを得たる一事である、それは私の法緣になる人が、當時小石川の宗教大學に居られた、此の人から一日病氣の見舞狀と共に『精神界』なる雜誌を送り

呉れられたのである、私はそれを讀んで他の宗教雜誌とは違ひ何となく有難味を感じたのでありました、それから引續て近角先生の『懺悔錄』やら、『信仰の餘瀝』、『求道』など送り呉れられました、自分はそれを讀み行くに從て、理窟以外に唯何とはなしに、佛の御慈悲なるものが、尊く思はれる樣に進み來たのでありました、然しまだ〳〵心底から佛を自分の親の如くに感じ、そして親が子を思ふ如くに、佛常に人生の上に我を照護したまひ、我を指導なし給ふと云ふ、親子一致の信を護ることができんのである、まだ自分と佛との間に、何にか障壁が在るように考へられました。

然るに私は一日病床に横りつゝ、不相變內外の失望よりして例の苦悶をなしつゝありました、處が、不圖私は人生は誠に頼み少きものである、夫れに反して人生唯一の頼みとすべきは、如來の御親のみでありと云ふことが心底から氣が付たのである。私は元來意志が薄弱でありまして、此れまで、兎角人に頼り人の力に依らんしました、それは全くあやまりであると云ふことを發見したのである。昨日まで兄弟の如く頼みとせし人も、一朝利害感情が衝突すれば、百年の交を不顧に至り、平生思與へし其者も、一度不利を見るときは、走て他の勢に趣くのが、即ち人生の狀態なることを、私は深くも思當てたのでありました、此の頼み少き人生に、唯一の間違ひのなき頼みとすべきものは、如來の御親一人である、如來常に我れに在して、我を照護し、我を指導なさせ給ふの一事に、氣を付けさして戴たのである、即ち自分が病氣に罹りしも、又人より見捨てられしも、皆之れ方便引入の如來大悲の善巧なることを、心底から承知したのであります。此時の嬉しさ喜ばしさは、眞に何とも云へぬ歡喜の情を催したのでありました、私が獲信いたしたのも、私が法悅に入りましたのも、即ち此の時であります、斯樣に獲信してより後は、何となく心が强くなり、如何に百萬の病敵が來たるとも、如何に世間から迫害が來るとも、我れには一人の御親が付きませば、少しも怖るゝに足らざるなりと云ふ勇氣が出來たのであります。古人が「憂きことの、猶この上につもれかし、限りある身の力ためさん」と云はれしように、私も尙ほ此上に大に世間の艱難や逆境と、戰ふと欲する向上心が起り來たのである、始終自分の身心の上に、佛の御親が付き纏はせられて、人生の上に於て何事も我を指導爲し給ふと云ふ感念が滿ちて來たのである、それ故に今まで死することを嫌ひし情も漸く無くなりまして、今度は反對にいつ何時死しても厭はぬように成て來たのであります、私が此れまで佛と自分との間に何にかまだ障壁が有て、親子一致の信を獲ることが出來なかつたのは、全く佛の慈悲救濟なるものを多く死後の方面にのみ認めてをりし爲めでありました。

然るに私は實驗よりして、眞に如來の慈悲が人生の上に如何に偉大なる御力を、あらはし給ふかを知たのである、私は常に近角先生の『懺悔錄』や『求道』を拜讀して、先生が十年前に實驗に依て信仰に入り給ひ、そして常に實驗信仰を唱道し給ふ譯を深く感じたのであります、信仰は決して學問研究などで、到底獲らるゝもので無きことを知たのである、斯く私は獲信して死生の運命を、如來の御手に任せし後は、妙な

る哉瀕死に陥りし重症も、漸く良好に向ひ、五月頃には床を離るゝ位どに回復したのである、そして今日にては全く病を忘れて、多少世の中に活動して居るのであります、然し醫師は矢張り肺の不良に進みつゝあることを警告し呉れるのである、されど私は深く留意せぬのであります、餘り極端の申樣なれど、私の健康狀態に復したのは全く法悅に入りし、不求自得の益であると、ありがたく信じて居る次第である、私は獲信したる當時、斯樣なるありがたき御文を、或る處より得たのでありました。

大光の御惠み、常に我等の上にあれば、病ありとも歎くにたらず、光明の國は待てり、貧しければとて悲しむべからず。無上の寶は我に與へられたり、他人我を斥くればとて恨むにたらず、同胞に斥けらるゝ程の者なればこそ、如來は我身を救給ふなり、瞬時の生存だも、決して是れ唯事にあらず、たゞ〳〵大光の照護を喜びつゝ、向上に前進すべし。

此の御文は眞に私の當時の境遇を、適切にあらはしたるもので、そうして私に大なる慰藉を與ふるものでありました、爾來私は此の御文を枕頭に掲げ家族諸共に、如來の御慈悲を喜ばして戴きつゝあるのであります、さて、私がつまらぬことを長々しく、告白するに至りました次第は、私が先般內務省主催の感化救濟事業講習會へ、地方村長の推選を受けて、出席することを得まして、私は滯京中屢々求道學舍へ參り、近角先生の御親切なる講演を親しく拜聽するの幸慶を得まして、益々法悅に入らさせて戴たのでありました、そして歸來一入法悅に住して、信仰生活を續けつゝあります、私は曾て信仰生活に入りし人の如何に人生麗はしきを、羨んだのである、處が今正しく自分が其の御惠みを受けつゝあるかを思へば、飛立つ程の嬉びのである、頃日も法友の來訪を得まして、談信仰問題に入りました、そして私は伏藏なく、自分目下の法悅狀態を物語りました、法友の申さるゝには「我れ今日當寺の佛前に禮拜せし時、いつもと異りし歡喜の情に滿されし、此れ即ち兄が溢れたる法悅の餘光ならんか」と大に隨喜致し呉れられたのである、何は兎もあれ私は唯喜びの餘り、そうして先生の御賜によりまして、自分の法悅に入りし厚程を、告白さして戴いたのであります、終にのぞんで我を逆境よりして法悅に入らさしめ給ひし如來の恩寵と、我が法悅の善智識とならせ給ひし、近角先生の御洪恩を奉感謝のである。

一、 蓮如上人仰られ候。堺の日向屋は三十萬貫ん持たれども死にたるが佛にはなり候まじ。大和の了妙は離一つもきかれ候へども、此度佛になるべきよと仰られ候由に候。

『蓮如上人御一代聞書』

一、 それ入萬の法藏をしるといふとも、後世をしらざる人を愚者とす。たとひ一文不知の尼入道なりといふとも、後世をしるを智者とすといへり。しかれば當流のこゝろはあなかちにもろ〳〵の聖敎をよみものをしりたりといふとも、一念の信心のいはれをしらざる人はいたづら事なりとしるべし

『蓮如上人御文』

懇切多生の御手引き

碓井くに

私の父は大層信心あつく、常に私等に向うて、佛法は聞かにやならん、世の中は老少不定ぢや、今日ともしれぬ生命なれば、うか〳〵と日暮してはならぬ、と口癖の樣に云ひましたけれども、何んにも耳には入らず、父上は何をいはれるかと思ふて居りました。

種々の困難にあふて後、店も大分繁昌してやれ一安心とおもふた處で、大事の悴が煩らひついて、三年も肺病で苦しみました。私は唯た如何かして治してやりたいと、看病したれど病氣が病氣ゆゑ、段々と弱つて、是れぢや兎ても治らぬ、とあきらめました。自分はあきらめたれど、如何かして當人に知らしてやりたいと思ひ幾度か云はふとしましたが、嘸、力を落すだらうと可哀さうて、可哀さうて云ふことが出來ませんでした。愈々病人は惡くなつて、もう死ぬ四五日前に「お前惡るけりや、おつ母さんは背なて〻上げるよ、樂くに寢てござい」と云ふて背を撫で〻やつたが、あまり、切ながつて大義がつて仕方なき故「惠一郎や、お前なほると思ふか、又あかんと思ふか」と聞いたら「如何であかん」といひました。そこで私は「あかにや如何せうと思ふ」と問ひましたら「おつかさん、其事は、心配して下さるな、私は疾くにあかんと承知して居れど、あなた方が案じると思ふから云はなんだ、私は第十八願の念佛に助けられて此度ありがたい往生をさせて戴きます、決して案じて下さいますな」と申しました。其時實に私は叱驚して感じ入りました。あゝ私は此年迄かふ云ふ事は氣づかなんだ、此子はまことに珍らしい事をいふ、ほんに其通りてあると深く感心し店のものや又そこに來あはして居た人々も、たつた二十二才で、まだ若いのに感心な事を云ふと互に感じあひました。それで私もあつかりとして氣も樂になりましたが、とう〳〵其から五日目に其言葉通り、樂に死にました。

私は此の樣に子供に是程聞きながら、まだ信心決定は得られなかつたてす。今思へば、ほんに、あれは濟度人ぢやつた、私も後世の事は知らず、父親も無論知らず、其子は十歳の年より年期奉公に行きましたが、其家は日蓮宗であつた故其樣な後生の事など聞かれる譯はありません。外へ出るといふても藪入りに年に二度出る斗り、何時、此の如き難有い事を聞いたものか、不思議でなりません、私はうつかり聞いて居ましたが、今から思ふと其子が死ぬ前の年にかふ云ふ事を云ふた事がありました。或時、私の姑が留守の時に、其子があまり長い間寢たもの故腰が痛さうだから、姑の柔かい蒲團をかりて敷いてやりましたら、姑が歸つて來て大層怒りました。私は胸が張り裂ける樣てしたが、子供は「おつかさん蒲團とつておばあさんにお返しなさい、あゝ氣の毒な、おばあさんは御信心がないから」とつく〳〵申しました。其時は何いふやらと思ひましたが、今思へば實に深い御手引と難有く思ひます。

私は其子の死んだ時に、あゝ不思議なや、實にあの子は濟度人だつたと思ふたれど、其時は思ふた丈て、眞からはよく

解つて居なかつたです。唯其後は御說教を聞かんならんと思ふて、諸所、方々に聽聞に行きました、そして、有り難いとは聞いたけれども、まだほんとの信心ではありません、或時は有り難くて〳〵涙流す事も度々なれど、それは、何んて泣くかと云ふと、死んだ子の事を思ひだし、其子の云ふた事なんかと思へてきて、泣けるので、あなたのほんとのおこゝろはわからなかつたです。

それからは三年經て、夫は死ぬ、姑は其一年の後なくなる、又引續いて妹も死ぬ、今一人の悴は神經病を病みついて一ケ年ほど治らぬといふ不幸續きて、其れや是れやで、身代もすつかり人手に渡さなければならぬ樣になると云ふ始末、餘り氣を遣つた爲に私自身も心臟病に罹り、かれ是れ二三ヶ月も床に就きました、其間、私の心中は丸で暗て、御信心の事は氣にかゝり折々は死後の事なんか思へど、たゞ寂しい、心細い斗りて、少しも光がありません。私がなぼると又悴はリユマチスにかゝり少しも歩む事が出來ません、身代はなくなる、働かうとしても働く事が出來ぬ、なぜ私は此樣に不幸なのかとつく〳〵悲しく情なくなりました。身代とても夫と私と二人にて辛苦して造りたるなれば、無くして元々なれど實に殘念でした。もうそうなると取る處からはとられず、たゞ殘るは借財ばかり、遂に店を執達吏にとられ、私は國へ、悴は他家へ食客に入りました。

一年程國許て養生して大分よくなりましたので上京し、諸所へ奉公などいたしましたが、少し働らくと又病氣が出て少しづゝ働らいては暇を取るといふ有樣でした。最後に奉公したのは、練塀町の寺に居ました時、其處へ說教を聞きに來られる老人の御紹介で來ました求道學舍であります。此處へ來てから毎日曜先生の講話を一年あまりも聞きましたが、先生の云はれる事は心からよく解らず、人生は當になられん、たゞ佛斗り眞實であるといはれても、成程そうであると無理に押へて、逃がしちやならぬと自分て押へて居た信心でした、死んだ先の事など思ふと、何んだか薄紙一枚はつた樣な心地がして如何も物足りなくて致方がありませんでした。

或夏私の知人が私の悴をよき商買に有りつかせるからと云ふて來ました、私は豫ねて、悴の商買の元手にもと思ふて、二三年以來、着るものも着ず、致度い事もせずに百圓近くの金を預けて置きましたが、今こそと思ひ、何卒宜しく賴むと其金を其人に渡しました、そして悴が其處へ出て商買する樣になつたら、知らせて下さい、私も多忙だけれど一寸でも行つて見るからと云ひました。すると四日經つても五日經ても返事が一向ありません、「さてな如何したのだらう」と考へ出したら寢ても寢られぬ、「さて、まあ見て來ませう」と車に乘つて見に行つたら、當人は病氣でねて居る、金の事も商賣の事も云ひたけれど、病人なれば云はなんだが歸つてから腹が立つやとも腹が立つや、人にはそれ見た事かと云はれると思ふから云ふ事は出來ず、一人して腹を立てゝ居ました。人の三年もかゝつて蓄めた金を、取られたかなあ、だまされたかなあ、あれは、鬼人ぢや惡人ぢや、あんな骨折つて蓄めたものをとると云ふは、何たる惡人だらうと夜になつても寢られず、口惜しくて致方がありませんでした。何にしても今一度行つて

聞いてやらうと五日目に又行きました。其時に病人は非常に惡るくなり、氷で冷して居ましたが、私がはいると直ぐ「火の玉が上る〳〵」と云ふて、其苦みと云ふたら、言葉にもいべませんでした、其時私は叱驚して「人は惡るい事するものでない、私の金を取ると直ぐあの樣な病氣した」其病人が氣の毒でならぬ、丸て地獄の苦の樣て、如何にして病人の心を樂にしてやりたやと思ひ、其時は金の事など、てんて云はずに歸りましたが、私は歸りの車の上て腹の立つたは何處かへ行つてしまつて、始めて嬉しくて〳〵泣いて歸りました、あゝ先生が何時も講話に「人生は當になられん、世の中は何事も駄目である」と云はれたが、いよ〳〵今日こそ、始めて、それを知らして戴きました、三年越にためた金も當になられん、愈々阿彌陀樣ばかりぢやと、其時は嬉敷て嬉敷てたまらん、七十、八十の金は此樣な有り難い事を知らして貰ふた上は何の惜しい事が有らうぞ、此年まて長らへさして貰ふて、身體も丈夫にして働かして下されて、此御信心に氣づかせて貰ふとはと、嬉しいやら、有り難いやら、學舍へ歸ると直ぐに如何思ふて二階へかけ上りたやら、佛壇の戸を押し開き、「あゝ私は長い間の御苦勞をかけました、長々と迷ふて來ましたが、今こそあなたの私一人の爲にいろ〳〵の御骨折下された事をわからして貰いました」と涙ながらに御託をして、下へ下り夕方の御飯の用意して皆さんに上げましたが、實に有り難くて、もう何にも心にはかゝらぬ。其翌日先生の講話を伺ひましたが、其時こそ天に躍り地に躍るほどに泣いて喜び、一々先生の云はれる事が腹の底にしみ渡り、佛の御親切と云ふ事をつく〳〵氣附かせて戴きます！

三つ四つの頃から御飯戴く時も常に佛樣に御禮とけさせて、すむと又御禮をさせられましたが、其頃はそれがいやて、宅はそふいふ家風かなんぞの樣に思ふて居りましたが、其樣な、ありがたい御信心の中に育てられた事を其時始めて氣附かせていたゞきました。かく喜びました上は、もう其金をとられた人の處へ行きましても、其人の上にはさしも憎しみがかゝりません、自分は長い間、御信心に氣附かなんだが、如何かして其人にも知らしてやりたいと、もう金などの事は思はず、悴如何したとも云はずに居ました。其人は大分もうよくなつて、寢たり、起きたりして居ました、先は金の事を云ふかと心配して居たらしかつたが、私が何も云はずに病氣は如何てすといひましたら、涙をポロ〳〵出して大變いゝと申しました、それやいゝあんばいぢや、私は此間來た時にとてもあかんと思ひました、それて御信心の事が氣にかゝて居たといひましたら、私は信心などの事は思はぬ、唯ボツとしたものぢやつたと申しました、されば私は心から可哀想になつて、此世はたゞ假の宿なれば、長い未來に眼をかけねばなりませんよと、よく御信心の話をして歸りました。つい此間までは私の金をとつた惡人ぢやと憎みましたが、その樣な心は少しもなく、前世に此人よりかりておいた金をなした樣な氣がいたしました。

其れからは、日々皆さんの食事の世話をして、ありがたく御恩報謝をつとめさして貰ひましたが、又二三ヶ月前より心臟が惡るくなり、此度はもうとても治らぬと醫者からも見放さ

れました、然し此病によりて、一層手強いあなたの御本願を戴かせて貰いました、病氣のはげしくなつた時も、私の頭の上にちやんと佛樣が居て下さる心地がして、何んとも云へぬ樂な愉快な心地でありました、もう自分一身は云ふに及はず、一人の悴の上も何の氣懸りもありません、よく世間には斷末魔の苦しみと云へど　少しも其樣な事はありませんで心身共に樂でありました。此樣な惡人女人を見捨てず、助けにや置かんといふて下さる、此御本願のありがたさ、もうありがたくて〳〵私ほど幸福な者は世界に無いと喜ばしていたゞいて居ります、病氣は人には見放されたれど、佛はまた、よくして下されて、今では殆んど快くなりました。日々、佛のおあてがひにあづかり、何に不自由すると云ふことなく、欲しいとおもふものは自然に、あなたより下されて、ほんに極樂の樣な氣がいたします。かふやつて常に寢ていましても、少しも退屈する事なく、嘗つて御本山に來詣した事だの、おぢいさんや父の信心について話してきかせて呉れた事だの思ひ出させてもらひ樂しくねて居ります。されど人間と云ふものは何處まで淺ましいやら、病氣のひどかつた時は佛の御慈悲斗り喜こばせてもらひ、自分の他の人々の佛間へおまゐりしたり、彼方此方へ行かれる足音を聞くにつけ、丁度極樂の菩薩方が佛の御用をして居られる樣に思はれましたが、今はそうではなくて、何かにつけて、折々は煩惱が起つてまゐります。あゝこの樣な煩惱のひどい淺ましい奴ればこそ、佛は助けて下されるのであると、又そのあとから一しほ嬉しくよろこばせてもらふのであります。實に此度の病氣により親樣の御力の強い事をしらせて貰ひ、他力の廣大なる御導を有り難く知らして貰ひました。長々と御信心に迷ふて、これが御信心かと少し心にありがたくなるとつかんでみたり、少し嬉敷なると又それが御信心かと思ふたりして居りましたが、今まで此樣な手強い御本願とは知らなんだです。實に罪惡の深い者を是程までに御めぐみ下さる事は、何といふ御慈悲やら、たゞ嬉し涙に溺ぶ次第で御座います。

●香月院讀經方規

將レ讀レ經時、必先洗レ手漱レ口、恭戴二經本一、當レ發二此心一。是經者、渡二三有海一般筏、證二大菩提一資糧、世々叵レ遇、生々難レ聞、今幸値レ遇。而後、以二慇重心一可二讀誦一、（先哲堅制不レ可二疾讀一見二經文一則見二諸佛一也一字具二佛諸德一故省二一字一則讀二佛諸德一也何得二疾讀一耶）又不レ可下口氣一拂中經上塵上五德一也何得二疾讀一耶）又不レ可下口氣一拂中經上塵上五徒必不レ可レ違二此制一、又讀習音吐、一仍二本山風調一、若學二他宗他派一則髣髴於改宗改派者一也。

講義

他力信仰の淵源

近角常觀

三　信仰と人生

第一章に於て、佛教と念佛と言へる事を說明する時に、既に信仰なるものは人生問題の上より入らなければならぬ事を說明して置いた。既に人生の上に見出したる信仰なれば、其の信仰を得たる時は、人生の上に光明を持ち來す事は當然の事である。去りながら古來宗教が衰へたる時は、いつも信仰が人生に直接に觸れぬやうになつてある。即ち信仰といふ事は吾人の日常生活の人生と離れて、單に內心に於て主觀的に信心の事を考へる事であるかの如く思ふやうになる。是れ大なる誤である。其處で如何にしたならば人生と信仰とが密接し來るかと言へば、先づ第一番に一章に述ぶるが如く人生夫自身の上に於て信仰の光を見出さねばならぬ。詳言すれば生老病死憂悲苦惱殆んど何物に於ても安心を見出す事が出來ぬが、唯佛陀の力のみ此人生の上に惠みを下し給ふといふ事を自覺せねばならぬ。斯く人生に於て何等の力によつても救はれぬが佛の力によつてのみ救はれると氣就きたのが絕對の信仰である。即ち第二章に於て述べし如く「親鸞に於ては唯念佛して彌陀にたすけられ參らすべしとよき人の仰せをかふむりて信ずる外に別の仔細なきなり」とある親鸞聖人の信仰は、言ひ換へれば人生は唯念佛である、信仰の外は無いといふ事である。此の人生の上に信仰を見出す時に、信仰己外に何物をも認めぬといふ事になりて居らねばならぬ。是れ即ち法然上人が專修念佛と言ひ、親鸞聖人が一心歸命と言はれる點で、蓮如上人に於ては、「もろ〳〵の雜行雜修自力の心をふりすて、一心に阿彌陀佛今度の一大事の後生御助け候へとたのみ申して候」とある點である。即ち人生唯念佛のみ、信心のみ、後助け給へのみといふ所謂絕對の信仰であらねばならぬ。既に斯の如き信仰を見出したる已上は其結果として、此の信仰は人生全體を照す所の光となる事は疑ひを入れぬのである。

抑信仰と人生といへる問題は、古來色々の題目となつて顯はれて居る。眞宗にいふ處の眞諦俗諦といへる如きが之である。然るに此の眞俗二諦の間に、前にいふが如き二者別物であるかの如き誤解が存して居る。通常眞俗二諦を譬へて、車

の兩輪の如く、鳥の兩翼の如しといふ次第である。此の譬は兩者相離る可らざる事を譬へたものなれども、又一面には二者別物であるといふ感じを與ふる傾がある。即ち眞諦の信仰があつても、俗諦の道德が全くなくてはいかぬ、又俗諦の道德があつても、眞諦の信仰が欠けてはいかぬと、二者相離してはならぬといふ考である。離してならぬといふ事は、離して存在し得るが、離してはならぬといふ意味になる。其處で內心には信心、表には王法といふやうになつて、つまり信仰が有つても道德が行へねば駄目である。苟も念佛行者と名のる以上は、俗諦門を守らねばならぬ、といふやうに考へられて居る。此の時は二者異なりたる物を揃へねばならぬといふ感じである。是れ畢竟眞諦俗諦は同一物であるといふ事を知らぬものといはなければならぬ。何故このやうになつたかといへば、即ち人生の舞臺を離れて眞諦の信仰を認めるからである。既に人生を離れたる眞諦なるが故に、其の眞諦が直に人生に働ける俗諦夫自身であるといふ事を知らぬ事となる。故に俗諦は別に信仰己外に世門の所謂王法仁義を守らねばならぬといふ事になる。斯くなれば信仰が直に人生に働くに非ずして、人生は信仰以外の道德的原理を要する事になる。信仰以外に別に道德の原理をしたゝむるならば、斯の如き信仰は人生に少しの光をも與へぬものと言はなければならぬ。

其處で前に立ち歸つて一言するに、釋尊は生老病死の人生問題の苦痛に對して、何物を以ても解脫を得る事が出來なかつた。富も位も學問も妻子も一も光を與へぬ。遂に樹下石上に涅槃の光を見出し給ひたが釋尊の解脫である。斯くありてこそ釋尊の涅槃は國家を救ふべく、父母をも救ふべく、國民をも救ふ可く、貧富貴賤有學無學皆な其の救濟に預つた次第である。法然上人の選擇本願又同樣である。即ち如來の本願は、戒に非ず、行に非ず、富に非ず、學問に非ず、乃至六度萬行三福諸善によるに非ず、佛の選擇攝取し給ひし唯一の廻向は、唯南無阿彌陀佛である。是れ法然上人の見出し給ひたる光明である。信仰である。夫故一たび此の信に入りぬれば、親鸞聖人の仰せの如く、唯念佛して彌陀に助けられ參らすべしとよき人の仰せをかふむりて信ずる外に別の仔細はないのである。即ち唯念佛の一つになるのである。一歩進んで、斯く信ずる一つになるのである。斯く信じ來れば、其の結果として顯はれ出づる絕對の態度が、「念佛はまことに淨土に生る、種にてや待るらん、また地獄におつる業にてや待るらん、

總じて以て存知せざるなり、たとひ法然上人にすかされ參らせて、念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔す可らず候とある。即ち念佛して地獄にゆくも極樂に往くも、そは眼中に無い、唯々法然上人のお供をする丈けの事である。上人の御供ならば地獄なりとも少しも後悔する所なしといふ決心である。是れ即ち信仰が人生に顯はれ來る態度である。『御一代聞書』に「善知識の仰せなりとも、なるまじきと思ふは大なる淺間しき事なり、何たる事なりとも仰ならばなるべきと存ずべし、此凡夫の身が佛になるうへはさてなるまじきと存する事あるべきか」とあるが、即ち此地獄におちたりとも更に後悔す可らず候と同意である。之を誤解して信仰は世に所謂暴虎馮河の勇を振つて、地獄に行つてもかまはぬと決心をする事ぞやと思うてはならぬ。自然の結果斯くなるのである。何故斯くなるかと言へば、上人自ら次に言うて居られる。「其の故は自余の行をはげみて佛になるべかりける身が、念佛を申して地獄にもおちて候はゞこそ、すかされたてまつりてといふ後悔も候はめ、いづれの行もおよびがたき身なれば、地獄は一定すみかぞかし」である。即ち何故斯のやうな絕對の態度が出て來るかと言へば、もと〳〵念佛以外の自余の行を勵む事の出來ぬ親鸞である。いづれの行も及び難き地獄必定の者であるからである。即ち如來は斯の如き者なる事をしろしめして、自余の行を選び捨て、何れの行もいらぬ、唯念佛して來いと仰せられる本願である。此の本願一つが人生の力である。此の念佛一つが生命である。決して地獄に墮つても後悔をせぬとか、力みをしたのでは無い。固より地獄に墮る者の爲に、選擇し給ひし本願なれば、善導の申されし如く、其の本願に順ずる一つである。法然上人の項かれし如く其念佛ばかりである。其處で次の文に「彌陀の本願まことに在はしまさば、釋尊の說敎虛言なるべからず、釋尊の說敎まことならば、善導の御釋虛言したまふ可らず、善導の御釋まことならば、法然の仰せそらごとならんや、法然の仰せまことならば、親鸞がまふす旨又以て虛なしかるべからず候か、愚身が信心におきてはかくの如し、この上は念佛をとりて信じたてまつらんとも、又すてんとも面々の御はからひなり」と如何にも思ひ切つたものである。親鸞の信ずる處は、此の本願一つである、其外に何物かゝ加はつて居ると思ふならば、大いなる誤であるぞ、唯念佛とあれば、念佛ばかりである、念佛の上に戒を加へんとも思はず、行を加へんとも思はず、念佛以外に道德を認め

ず、念佛以外に父母をも認めず、弟子をも認めず、「親鸞は父母孝養のために念佛一遍にても申したること候はず」、念佛は念佛である。一聲の念佛なりとも父母孝養のためといへる余地は無いのである。「親鸞は弟子一人も持ず候。ひとへに彌陀の御催しに預りて念佛する人を、吾が弟子を申す事は極めたる荒涼のことなり。」念佛以外に弟子も無ければ、師匠も無い。念佛即ち法然上人なればこそ「地獄に墮ちたりとも後悔すべからず候」念佛即弟子なればこそ「ことゝく如來上人の御弟子」なり。法然上人が天の星も南無阿彌陀佛と仰せられたも此の味はひである。親鸞聖人が『化身土の卷』に、日月星辰天神地祇諸天善神悉く南無阿彌陀佛を稱ふる人を護持養育し給ふとあるも茲である。蓮如上人が衣の襟を御叩きありて南無阿彌陀佛よ、疊を叩きて南無阿彌陀佛にもたれたる心地がすると仰せられたが之である、もと〳〵南無阿彌陀佛一つで助かりたる人生なれば、人生悉くが南無阿彌陀佛である。是れ信仰と人生との關係である。

猶ほ此問題に就きて大に注意すべき點は、法然上人と親鸞聖人と、人生に於ける生活の趣きの異りたる點である。法然上人は一心金剛の戒師にして、固より精進潔齋の人である。之に反して親鸞聖人は肉食妻帶の生活をせられ、在俗同樣の家庭的行狀である。之れ何人も兩師の間に矛盾あるかの如く考へ易き點である。去りながら前來述べ來る法然上人の選擇本願の意味より味ふ時は、充分に了解出來るのである。人生既に南無阿彌陀佛の一行のみ。戒を加ふるにも非ず、行を加ふるにも非ず、法然上人南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本と信ぜられた時は、法然上人の眼中には念佛以外に戒律の存在は無い。法然上人は固より持戒の人なれば、此念佛を信じたればとて殊更行儀に於て戒を廢せらるゝ事は無い。されど念佛の上に其戒を加へて身を淸淨にするといふ御考はいつも無い。夫故選擇集にも特に破戒無戒のものゝ爲に選擇し給ひし本願なりと仰せられてある。又蓮生房の尋ねに對しても、板の間に坐るも疊の上に坐るも、又其疊が破れてあるも破れて無きも、平等である如く、戒を持ちて南無阿彌陀佛を稱ふるも、戒を破りて南無阿彌陀佛を稱ふるも、平凡夫の儘て南無阿彌陀佛を稱ふるも皆同じ事であると仰せられたは此點である。即ち法然上人は疊の上の南無阿彌陀佛、親鸞聖人は板の間の南無阿彌陀佛である。疊の上に居る者は疊を叩いて南無阿彌陀佛、板の間の者は平凡夫の儘の南無阿彌陀佛である。此の點に於

ては親鸞聖人と法然上人と精神は一致てあるが、親鸞聖人は遺憾なく法然上人の眞意を明かに實現されたのである。其處て一歩を進めて親鸞聖人が法然上人の御敎化を人生上如何に受けてあるかを明かにせねばならぬ。法然上人は南無阿彌陀佛は不廻向であると言はれた。其處て親鸞聖人は行者の方よりは不廻向である、而して如來の廻向である、此の如來の廻向を往還二種の廻向と申された。此の二種の廻向といふ事は畢竟人生は皆な如來の我等に與へ給ふ惠みであるといふ事ぢや。故に親鸞聖人にして見れば在家の生活の其の儘が、即ち如來の惠みである。家庭的行儀の其儘が全く如來の我を導き給ふ惠みである。茲に於て親鸞聖人の眼中には自分の一生を導いて下された者は、皆如來の御導きである。我に念佛を授け給ひし法然上人は智慧の勢至菩薩、我に求道心を起さしめ又家庭的生活の上に御慈悲を頂かしめ給ひし聖德太子は全く慈悲の觀世音の化身である。「我二菩薩の引導に順じて、如來の本願を弘るにあり」、和讃に「觀音勢至もろともに、慈光世界を照護し、有緣を度してしばらくも、休息あることなかりけり。」といふは、親鸞聖人の信仰より來る人生觀である。親鸞聖人は信の一念に即得往生と申さるゝ。即ち信の一念に攝取不捨の慈懷に收められ、正定聚不退轉の新生活が始まるのである。其信仰的人生の光景に至りては實に偉大なるものである。親鸞聖人が現生十種益といふ事を申されたが實に是てある。冥聚護持、轉惡成善、至德具足から三世十方の諸佛の證誡護念より、化身土及び現世利益和讃の所諸天善神の護持養育に至るまて皆信仰的人生の有樣てある。茲に至りて親鸞聖人の信仰は聖德太子の眞諦即世諦の大敎佛敎を遺憾なく實現されたるものにして、又釋尊の生老病死即ち涅槃の眞佛敎の精神を發揮せられたものてある。是れ實に本願圓頓一乘の骨髓にして、三世十方如來の出世本意である。即ち親鸞聖人が晩年圓熟したる信念を以て讃歎せられたる左の二首の和讃に信仰的人生の大光明が耀きてある。曰く

超世の悲願きゝしより　われらは生死の凡夫かは、
有漏の穢身はかはらねど、　こゝろは淨土にすみあそぶ。
大願海のうちには、　智愚の波こそなかりけれ、
弘誓の船にのりぬれば　大悲の風にまかせたり。

上來簡單なれども、人生と佛敎、佛敎と念佛、念佛と信仰、信仰と人生といふやうにお話致し、一面には人生問題によりて信仰に入り、信仰に入りて光明の人生に出て來る實驗を明かにし、一面には佛敎全體の眞精神が、即ち親鸞聖人の眞宗てあるといふ事を申したのてありました。

嘆詠

やむひと

はっぷう

やまひのとこに
なやみふすひと
さもくるしげに、
そのわかゝりし
むかしのけはひ
いまはなごりも
とゞめぬごとし。

ひとつのまどの
とおしひらきて
とのもみやれば、
あつきかんばせ
たちまちすゞし。

きゞにはなをも
さかしめにける、
このこゝろよき
すゝしさゆゑに、
のぞみもたゝし
なやめるひとも
あまきゆめぢに
しばしをいゝぬ。

さはさりながら
あゝいかにせむ、
たぬしきおもひは
いたくこゝろを
おどろかせるを、
よろこびさめて
なやめるひとは
もとのいたみを
またおぼゆるを。

（ヘッペル）

時報

求道の好季節

例年の如く秋に入りて求道の好季節とはなりぬ。吾人は夏期傳道を畢りて後專ら中央首都に於て傳道に從ひしが、青年學生の求道者は正に森嚴秋の靈氣に打たれ、日曜の朝、霜を踏んで學舍に來集せらるゝ有樣、偏へに佛智の御催うしと、いと尊し。殊に本年は內務省開催の感化救濟講習會、及び監獄協會主催の免囚保護講習會ありたるため地方御同朋の來訪參聽せらるゝあり、又全く求道の心に促がされて遠く石見國より訪ね來給ひし町原虎之介氏の如きあり、又高等師範內佛敎會は休暇前に於て『略文類』を講了せしを以て、今秋よりは『歎異鈔』を再び新に講ずる事となり、非常の熱心を以て毎週月曜の日沒後に至る迄聽講せられ、又第一高等學校德風會も同樣『略文類』を終りて新學年より『歎異鈔』を始め、毎月二回求道學舍に於て夜會を開き燈下團欒して信仰を語るなど、有難き極みなり。殊に本月末は例年の如く報恩講の季節なれば、世間は秋の老ゆると共に肅殺悽愴の感に堪へざるも、信仰の內界は却て森嚴の氣溢れて、聖人の恩德を感謝するの情いと深し。

大谷派傳燈式

十一月十日京都大谷派本願寺に於て傳燈式擧行せられ、彰如上人當法主の職に就かせられたり。吾人は其神靈なる式典を拜し、且つ其傳道部の講話に列せんが爲に、八日日曜講話後出立、九日未明京都に着し、先づ謹んで聖人の靈龕の下に拜禮し、十日其聖式に參し、又午後大谷本廟奉告式を拜し、私に誠を捧げつゝ其夜總會所に於て「如來の加威力」の題を以て講話し、翌十一日夜市會議事堂に於て、「歎異鈔と御一代聞書」の題を以て講話せり、其要領本號社說に揭くる者是也、吾人は徹頭徹尾信仰的意義の外、認むるものなし、正に維れ、宗門光微かなるの時、唯々如來の加威力によりて徐ろに佛日の曙光東天に輝き、再び天に冲して普く世界を照耀せられんことを乞加し奉る。句佛上人の句に曰く

鶯子啼のよるべあはれめはだか枝

歸省、沼津

十三日早朝京都を出立して、江州故郷に歸省す。母上閭に倚りて待たる。恰も田園黃熟の時節、五穀穰々として人皆喜色あり。傳道二日間、十六日晩亡文の墓に詣うて出立す。十七日朝沼津に着す。嘗て學舍にありし石川慈惠君及、眞宗大學出身の杉山泰巖君出迎はれ、沼津本派本願寺說敎所に着し、沼津監獄に於て印南典獄に面會し、又一場の敎誨をなし、午後說敎場に於て一般公衆の爲に二回の講話をなし、晩臘扇會に於て久振りにて同朋諸氏と相會して團欒信仰談をなす。而して歸路同朋の一人二瓶君危篤の事を聞き大に驚き、翌朝昧爽病床を訪はんとしつゝある時、恰も訃に接す。即ち馳せて遺骸に見え、且つ謹みて讀經す。氏は臘扇會員にして亦梁川君同人の一人なり。今偶來りて氏の終焉に遇ふ。まことに不可思議の宿緣といふべし。十八日午後二時歸京。

求道會館設立趣意書

現時社會の大勢を察するに、國民に眞摯なる氣風頗る乏しくして、益々信仰の必要を感じ、一般に道義の制裁弛み去りて皆嚴格なる實行を想ふ。此に於てや青年學生にして眞面目なるものは、確實なる信念を攫まんとして胸中幾多の苦悶を抱き、社會實務の人にして志操清淨なるものは其理想を實現せむが爲に、人生問題の解決に辛酸を嘗めざるはなし。嗚呼信仰の饑渴現時の如く劇しきはなく、求道の志此の如く切實なるは未だ嘗て見ざる所也。

昨年已來、聊か此の時運の必要に應ぜんとする微志あり、先輩の企てられし跡を引繼ぎて、一方には求道學舍を設け、此等の道を求むるの人々の寄宿に充て、寢食を同じくして共に實踐躬行に勉め、また一方には日曜講演を開きて眞面目なる人々と共に心を潛めて信仰の問題を講じ、互に心靈の修養に從ひしが、幸に佛陀冥祐と師友同情とによりて其期する所空しからず、學舍は常に滿員にして幾多の申込に負き、假會場に充てたる居間は狹隘を訴へて求道の人々を容るゝの餘地なし。此に於てや止むなく、懇切なる道友の勸告に從ひ、學舍を擴張し、會館を設立して以て焦眉の急に充てむと欲す、幸に篤實なる先輩の指導に從ひ忠實なる親友の贊助を仰き、着着實なる實行により漸次其結果を舉げむこと是實に不肖の至願也。

從來首都に於て佛敎徒に屬する會館の設なく、其不便を感ずる事一日の事にあらず。而して屢々計畫せられて、未だ容易に實行の緒につかざる所以のものは、蓋し其規模大にして完全を期すれはなり。故に先づ現時の必要に應すべき適宜の會館を設立して、漸次其大なるものに進むることを欲す、是先づ本會館の建設を企圖して佛敎者一般の需要に充て且つ清潔なる社交の中心に供せむと欲する所也。予西遊の際、泰西青年會の組織及會館の設備等を初として、幾多の社會的施設を詳細調査し來りて、此等の事業の我國佛敎者の手に成らむ事を望む實に切也。本會館建設の如き若し燎原の一點火たるを涼得は幸之に過るなし。冀くは四方同感の諸士不肖か微衷を察明治三十六年十月

發起者　近角常觀

求道會館設立喜捨金受領報告（第卅七回）

一金貳圓也　羽村　中里庄五郎殿
一金壹圓也　東京　響田御老人殿
一金五圓也　肥前　吉原政道殿
一金貳圓五拾錢也　上野　井野定次郎殿
一金壹圓也　信濃　佐崎聿喜殿
一金壹圓也　越前　後藤辨宏殿
一金壹圓也　越中　乘杉敎存殿
一金貳圓也　沼津　石川慈惠殿
一金壹圓也　信濃　津田八左衞門殿
一金拾圓也　鎌倉　淫田重弐殿
小計　金貳拾六圓五拾錢也

通計金參千六拾四圓四錢也

右御寄附を忝うし難有奉存し候茲に謹みて奉感謝候也

清澤滿之師序　近角常觀著（彌々出來せり）

增補訂正

信仰之確立

第拾版

改正定價　一冊金卅錢　郵稅四錢

久しく品切なりし本書は、彌々今回大訂正大增補、根本的改善を加へて發行せられたり。改善の主なる點は左の如し。

內容の增加

著者は本書の完全を期する爲め、新に增補する處六章、殊に著者自身が爾後の信仰經過を告白し、如來の加威力を感謝せんが爲に、附錄として『予が信仰的實驗』の一篇を增加したり

改版訂正

本書は既に九版を重ね、發行部數一萬以上に達し、版毎に訂正を爲せりと雖も、猶ほ遺憾の點尠からざるを以て、今回は全部を組み直して著者自ら誤植訂正は勿論猶ほ文句の上にも改竄する處少からず。

製本體裁

成る可く華美輕薄をさけ、質素堅實を旨とし、初版の體裁を維持するに努めたりと雖も、紙質製本等に於ては、充分の注意を加へ、從來發行のものに比しては、一段の改良を加へたり。

斯の如くにして本書は、其內容に於て、其の外形に於て、根本的に面目を一新するに至れり、若し夫れ本書の價値如何に至りては、著者近角が入信劈頭に於る告白感謝の結晶として、既に諸君の知り給ふ處、願くは我が同胞諸君、一讀再讀の榮を給ひて、如來救濟の大事實に着目し給はん事を、謹みて白す。

代金既送ノ諸君ニ謹告

前記訂正改版の爲め改正定價金卅錢郵稅四錢と致し候。就きては從來拾五錢定價にて御申込の諸君は、本書御落手と同時に、不足代金早速に御送附願上候也

發行所　東京本郷區森川町一番地　振替口座一六六九六六番　求道發行所

新刊廣告

宗教問題の解決

佐藤太著

目次

統一團の組織
第一章 教界の現況
第二章 各人の解釋と處置
第三章 教祖教の特質
第四章 現代の宗教問題
第五章 一段の解決
第六章 個人教の形態一班、
第七、八、九章 個人教の論據
第十、十一、十二章 今一層の解決
第十三章 結論

今や世界の宗教界は窒息の狀態にあり。是れ現代人類の最大不幸にして、其禍や社會諸般の制度現象上に及べり。しかも未だ何人も明快に其所以を確め、其發展の活路を示せるなし。今や此が疏通解決を試みんため、過現の宗教事情をかへりみて其眞因をさぐり、更に今後の宗教はほゞ如何樣に轉化しゆくべきかを揣摩したり。蓋し宗教事に思を潛むる人々の一讀を乞ふに足らんか。著者はまた殊に所謂宗教冷淡者に此小冊子を薦む。

十月中旬發賣
實價三十五錢

發行所
賣捌全國各書肆
取次
京都市外下鳴入口
京都市今出川御門新北小路町十四
統一團出版部
家庭社

本邦唯一の布教專門雜誌

布教

第貳號發兌

明治四十一年十一月十五日發行

毎月壹回十五日發行

第十一月十五日發行 第貳號

第貳號目次

▲拜讀戊申詔書……大內青巒
▲布教地理……(一)……白銅鞮
▲歷史研究より見たる佛教家の態度……鷲尾順敬
▲監獄教誨瑣談……(一)……加藤咄堂
▲演說……武田慧宏
▲王陽明先生……高瀨武次郎
▲教の權威……前田慧雲
▲大中至正……忽滑谷快天
▲感化事業所感……村上專精
▲教材……文學博士
▲頓阿法師(史傳)……加藤咄堂
▲尼了然(逸話)……同
▲三度一切經を讀みし信淵……同
▲鷹山公と煙草、酒の通帳(聖典物語)……栗園
▲舍利弗歸佛談……三舟
▲動物本生譚(談叢)……白銅鞮
◎月中の兎◎鹿の本生譚◎鼠クサカリ王を授く
▲昔がたり(禪林)……亂柚子
▲禪林茶話(警喩)……賣茶翁
▲華嚴經の譬喩(泰西資料)……大屋德成
▲日本に於ける商業道德……嘯風生
▲王室の教育……同
▲南濠州に於ける貧兒の取扱法……同
▲世界文明の母(談片)……同
▲厭世と煩悶……新渡戸博士
▲教會評判記(佛教青年傳道會)……○生
▲新著紹介……▲教界彙報……▲雜報……
▲日本新道史……(二)……足立栗園

◎本誌は趣味津々材料豐富熱心なる布教師の寶庫傳道攻究の先驅たり

本誌は布教家に必要なる新資料を供給し缺く可からざる學科を講述すると共に、布教に關する論議と一切の報導とを本領として發行するものなり、材料豐富、解說懇篤、報導正確、本邦未だあらざる布教專門の好雜誌なり

特に本誌は東京の教會に於て毎月講說せらるゝ諸大家の演說、法話等は漏さず文字と變じて顯はれん、又た海外に於ける新思潮は獨得なる報導により常に連載せらるゝ、本誌を常に愛讀せらるゝ布教家は絕へず新鮮なる空氣を呼吸するに等し

◎本誌には社友優待の規定あり

發兌元 東京振替貯金區口座木八八 森江書店 東京本郷春木町二丁目九番地

近角常觀著

人生と信仰

最新刊　定價卅錢　郵稅四錢　袖珍美本

第一章　人生問題と信仰　第二章　悲觀思想と信仰
第三章　倫理力行と信仰　第四章　犯罪心理と信仰
第五章　社會問題と信仰　第六章　國家秩序と信仰
第七章　世界宇宙と信仰

本書は一昨年雜誌『求道』秋季號として發行したるもの、近時四方同胞諸氏の需要益々急切なる爲め、再び一冊として茲に刊行したるものなり。蓋し現代思想界の亂調は律法的教訓、若くば物質的施設を以て根治する事難かるべし。獨り信仰により根本的に自覺して。初めて解脫せる眞人生に入る事を得ん。是れ本書を發行する所以也。

發行所　東京本郷區春木町二丁目　振替口座八二一九番　森江書店
取次所　東京市本郷區森川町一　振替口座一六六九六番　求道發行所

近角常觀著

親鸞聖人の信仰

定價七十錢　小包料八錢
クロース綴　美本

彌々出來せり

附錄　眞宗教證

本書は嘗て本誌に連載せる。眞宗慶嘆に大訂正を加へて一書に纏めたるものなり、絕對他力信仰の大權化たる親鸞聖人一代の教證に對し。著者が平生抱懷せる渴仰、尊崇、憧憬の至情は本書に溢れて餘蘊無し。

發行所　東京巢鴨町二ノ三五　振替口座三一二二番　無我山房
取次所　本郷區森川町一　振替口座一六六九六番　求道發行所

急告

近角常觀著

信仰之餘瀝要略

定價金五錢　郵稅金貳錢（但し三冊迄は郵稅貳錢）
五十部以上二割引

右は今回さる御方の御依囑により「信仰之餘瀝」中の眼目、宗教的同朋、信界に於ける監獄、以下數章を拔萃し、施本用小册子として印刷刊行の豫定に候、就ては他に御同志の諸君も有之候はゞ、印刷部數等の都合も有之候に付、早速御入用の部數御申込被下度く、傳道用施本としては確に適當の者ならんと相信じ候也。

近角常觀校訂

冠頭　歎異鈔

定價　五錢
郵稅　二錢
（但シ三冊迄ハ郵稅貳錢）
五十部以上二割引

此の『歎異鈔』は心を込めて出版せるものにて、讀み易き樣に字をまばらに植え、校正を嚴密になし、且冠頭を加へて諸聖教中より參照すべき文を引用し、親切に作りたるものなり。亦傳道用施本として恰好たるを失はず。

發行所　東京市本郷區森川町一　振替口座一六六九六番　求道發行所

規定

一　本誌は毎月一回一日發行とす
一　本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
一　本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、但し其節には登記料金貳錢必ず御加算々請ふ
一　郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事
一　郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事
一　凡て送金受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし
一　本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
一　回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
一　本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	郵稅一冊に付五厘

廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

明治四十一年十月廿八日印刷
明治四十一年十一月一日發行
發行兼編輯人　近角常觀
印刷人　白土幸力
東京市本郷區森川町一番地
發行所　求道發行所
（振替口座一六六九六番）
東京市神田區表神保町
大賣捌所　東京堂

前號要目

求道

◎如來は無碍也

◎信仰即修養

感謝

◎鳳輦鶴駕◎舊友溫情◎山河と人機◎藤崎◎秋田◎山形◎若松◎感恩感謝

講話

◎如來の清淨願心　近角常觀

雜錄

◎予が實驗の信仰に就て　近角常觀

◎東北傳道

講義

◎他力信仰の淵源　近角常觀

二　念佛と信仰

歌詠

◎秋の日　八風

◎秋の夕　甲之

◎デヴァスの曲　八風

時報

求道第五卷第拾壹號　明治四十年十一月十二日第三種郵便物認可　明治四十一年十一月一日發行（毎月一回一日發行）

東京市神田區淡路町二ノ一　三光堂印刷